

# 明治期の寓話集等に載つたイソップ寓話

吉見 孝夫

## 一 明治期におけるイソップの普及

明治期は、日本においてイソップの名、その寓話のいくつかが国民的常識となつてていく期間であった。ここに詳細に論ずることは省くが、明治三〇年までには、イソップの名が一般に知られ、動物寓話の代名詞となつている。二〇世紀になつてから明治末までの十年余の間にも十余種のイソップ寓話集が刊行されている。明治とはイソップブームの時代だといつてもあながち過言ではない。そして大正期になると、子ども向け読み物に文芸性を求める鈴木三重吉の『赤い鳥』が現れ、教訓物として主に読まれたイソップの影響力が相対的に弱まる。

明治期にイソップが普及していったのには、四つのルートが考えられる。一つにはイソップ寓話集の刊行がある。筆者の知る限りでは明治期には二十余のイソップ寓話集が出版されている。次に一般の寓話集類の刊行がある。これらにもイソップ由来の話が相当数含まれている。第三に教科書類にもイソップ寓話が教材として採用されている。修身・読本・英語の授業を通して児童・生徒はイソップ寓話を知る。特に国定教科書に採られている場合は、ある時期のある学年のすべての児童が教えられる

のであるから、普及における貢献度は大きい。四番目に新聞・雑誌にも掲載されている。この第四のルートについては既にいくつかの論文を発表した。

尤もこの四つのルートは截然とは区別し難い。イソップ寓話集 자체が教科書として使われてもいる。明治期の普及に最大の影響力を持つた渡部温の『通俗伊蘇普物語』（明治六年四月）は、修身の教科書とも目されている。イソップ寓話集の中には、話数は少ないが非イソップの寓話を載せる例もある一方、一般的の寓話集といつても半數以上の話がイソップ由来の本もある。このように分類に曖昧さも残るが、区別を厳密にすることが特段の意義を持つわけではない。要は多様な形で人々の目に触れた、その様相を明らかにすることが筆者の目的である。

今回ここに公にするのは第二のルート、イソップ寓話集を除いた一般の寓話集等に掲載されたイソップ由来の寓話である。ここに取り上げたのは多くは寓話集であるが、一般的の書籍にイソップ寓話が引用されることがある。それらもこの小論の対象とした。「寓話集等」としたのはその謂である。

なお、明治四五年（一九一二）七月三〇日に大正と改

元されるが、ここでは一九一二年末までを明治期とする。

## 二 イソップ寓話を掲載する明治期の寓話集等

以下に筆者が調べた範囲で判明した、イソップ寓話を掲載する寓話集等（イソップ寓話集を除く）を時系列で示す。太陽暦が採用されたのは明治六年一月からなので、明治五年までは旧暦の月である。

- 明治二年（一八六九） 渡部温『経済説略』
- 三年（一八七〇） 小幡篤次郎『生産道案内』（五月）
- 五年（一八七二） 福沢諭吉『童蒙教草』（六月）
- 六年（一八七三） 省己遊人『西洋稚児話の友』（八月）
- 今井史山『西洋童話』（八月）
- 加地為也『西洋教の杖』（九月）
- 七年（一八七四） 西村茂樹『経済要旨』（六月）
- 一〇年（一八七八） 小幡篤次郎『経済入門 一名生産道案内』（六月）
- 一九年（一八八六） 池田龜藏『修身勧』初篇（五月）・次篇（一一月）
- 二〇年（一八八七） 青木富士『通俗繪入学芸独案内』（五月）
- 二一年（一八八八） 川田孝吉『小学生徒修身教育昔話』（七月）
- 二二年（一八九〇） 綾部乙松『小学生徒修身教育昔話』（一〇月）
- 二三年（一八九一） 大館利一『修身之教』（五月）
- 二四年（一八九二） 大館利一『西洋日本昔話』（九月）
- 二五年（一八九二） 西野正勝『尋常小学生徒教育』（七月）
- 木原季四郎『児童教育知恵宝』（七月）
- 小池清『通俗修身談』（一〇月）
- 瘦々亭骨皮道人『面白叢談』（一一月）
- 二六年（一八九三） 西村寅二郎『教育修身談』（一月）
- 西野正勝『尋常小学生徒修身話』（一月）
- 佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』（三月）
- 鎌田淵海『少年仏教修身はなし』（三月）
- 森下龜太郎『家庭教育日本修身談』（四月）
- 秋元政『教育幼稚の宝』（五月）
- 二六年（一八九三） この頃坪内雄藏『英文評訳』か。

- 二九年（一八九六）  
西村寅二郎『教育修身美談』（一一月）
- 三〇年（一八九九）  
堀三友・秋野茂吉『伊蘇普実伝』（一一月）
- 三一年（一九〇〇）  
坪内雄藏『文学叢書 英詩文評釈』（六月）
- 三八年（一九〇五）  
東基吉『家庭童話母のみやげ』（一〇月）
- 四〇年（一九〇七）  
東基吉『教育童話子供の楽園』（四月）
- この頃から「少年お伽噺」シリーズか。
- 四一年（一九〇八）  
この頃から「明治少年お伽噺」シリーズか。
- 四二年（一九〇九）  
この頃から「絵入日本お伽噺」シリーズか。
- 四三年（一九一〇）  
小蝶山人『少年お伽演説』（六月）
- 馬場直美『お伽百題』（一〇月）
- 四四年（一九一二）
- 天籟山人『新お伽十八番』（一一月）
- 鈴木源四郎『少年教育修身はなし 動物の巻』（一一月）
- 渡部温『經濟説略』（明治二年）
- 小幡篤次郎『生産道案内』（明治三年五月）
- 小幡篤次郎『經濟入門 一名生産道案内』（明治一〇年六月）
- 西村茂樹『經濟要旨』（明治七年）
- 『經濟説略』は、維新後に徳川家が創設した沼津の兵学校の英語教員であった渡部温（一八三七～一八九八）が沼津において自身（無尽蔵版）で出版した英語教科書。
- 三 揭載書の概要と掲載話
- 前節に示したイソップ寓話掲載の寓話集等の概要と、掲載話のタイトルを示す。寓話の中には、改作、翻案の程度が甚だしく、一読してはイソップと無縁に見えるものもあるが、イソップに基づくと判断される例はここに採った。イソップ寓話の範囲は、Ben Edwin Perryの*Aesopica*(University of Illinois Press,1952)に収まれるもの他は、明治期までに日本に入ってきた以下の文献に所収の寓話、イソップ伝に限った。
- 『エソボのハブラス』(ESOPO NO FABVLAS)  
仮名草子『伊曾保物語』  
Robert Thom『龜拾喰記』  
Thomas James: *Aesop's Fables*  
George Fyler Townsend: *Three Hundred Aesop's Fables*  
Charles Stickney: *Aesop's Fables*
- なお、当該の寓話集等に、寓話番号等の検索の手がありがない場合は、該当箇所の丁付、ページをタイトルの下に記した。タイトルの下の括弧内に「A 112」等としたのは*Aesopica*の寓話番号である。「アリとキリギ里斯」で知られる寓話に該当するのは*Aesopica*では二話あり、二つの番号（112・373）を併記した。挿絵のある場合は、括弧内に「絵」と記した。

主に Richard Whately の *Easy Lessons on Money Matters* (1833) を英語のままに、左開きの和装本に仕立てて翻刻する。これに以下の二話のイソップ寓話が引用されている。詳細は先に小論を公にした<sup>注一</sup>。渡部は『通俗伊蘇普物語』を翻訳するに際して、これららの本文を参考にしてい。<sup>4</sup>

- 1 Lesson VI On wages Part II (A 112 · 130373)

- 2 Lesson VII Rich and Poor Part III (A 130)

『經濟説略』の翻訳には次の二種がある。

小幡篤次郎（一八四二～一九〇五）『生産道案内』（明治三年五月）。東京の尚古堂から出された整版による和装本。訳文は文語体。これには『經濟入門 一名生産道案内』（明治一〇年六月、壳捌書林丸屋善七）という改訂版があり、これららは活版による洋装本。訳文に多少の異同がある。

西村茂樹（一八二八～一九〇一）『經濟要旨』（明治七年文部省刊。その後各地の出版人の手でも刊行される）。活版による和装本。訳文は文語体。

福沢諭吉『童蒙教草』（明治五年六月）  
福沢諭吉（一八三五～一九〇一）による、「英人チャンブル氏所著のモラルカラッスブック」（序）即ち William Chambers & Robert Chambers の *The moral class-book* の翻訳。初版は東京の尚古堂から五冊仕立ての和装本として出版された。訳文は文語体。以下のようにイソップ寓話を載せる。

1 第一章 (イ) 「子供と蝦蟆」(*Aesopica* はなし)。James 172 The Boys and the Frogs (回話)

2 第四章 (イ) 「百姓其子に遺言の事」(A 42)  
3 第五章 (イ) 「力の神と御者との事」(A 291)

4 第五章 (ロ) 「麦畑の雲雀の事」(A 325)

5 第八章 (イ) 「仮着したる鳥の事」(A 472)

6 第十章 (イ) 「二足の蜜蜂の事」(A 80)

7 第十二章 (イ) 「黄金の玉子を生む鶯鳥の事」(A 87)

8 第十二章 (ハ) 「御殿の鼠と田舎の鼠の事」(A 352)

9 第十二章 (ホ) 「蝦蟆の仲間に君を立てる事」(A 44)

10 第十三章 (イ) 「蟻と蟲螽の事」(A 112 · 373)

11 第十六章 (イ) 「風と日輪と旅人ととの事」(A 46)

12 第十七章 (イ) 「盜賊雀の事」(A 656)

13 第二十六章 (イ) 「羊飼ふ子供狼と呼びし事」(A 210)

省己遊人『西洋稚児話の友』（明治六年八月）  
省己遊人については調べがついていない。「自叙」に「楯岡氏印」の印記があるので、楯岡姓とわかるだけである。

西洋の子ども向けの物語を翻訳した本が少ないので、「勸善懲惡の意を含み専ら稚児の解し易きを主として」（自叙）編集された。東京の中外堂から和装で出版される。文語体。全一九話は、イソップや聖書から採った話が多い。  
筆者が閲覧した国立国会図書館本には「初集」とあり、卷末の「目録」には「西洋稚児話の友 全二冊」とある。

ので、第二集があるものと推定されるが、その存在は確認できていない。

次の「一話がイソップ由来と思われる。二話には見開きの挿絵がある。絵師は小林永濯（一八四三～一八九〇）。

1 「牛と荷車と骨折比較の事」2才 (A 45)

2 「人欲深く取らんとして損失せし事」2ウ (A 87)

3 「鶴狐の返報する事」3才 (A 426)

4 「二足の墓水を尋る事」5才 (A 43)

5 「童子蜂草に刺されたる事」6才 (*Aesopica* はない)。

James 本の 130 *The Boy and the Nettle* と同話)

6 「老人子供に遺言の事」6ウ (A 42)

7 「鼈鼠獵士に出会せる事」8才 (A 150) (絵)

8 「狐己れの恥辱を繕はんとする事」10才 (A 17)

9 「雲雀巣窟を出る時雞に申置事」11ウ (A 325)

10 「老人人を楽ませんとて却て恥をかく事」13才 (A 721) (絵)

11 「狼鶴に恩を報ひざる事」26ウ (A 156)

今井史山『西洋童話』(明治六年八月)

「自序」に拠ると、「母の教育かたに依りて賢人とも愚人とも成事なれば」と母親が小学入学前の幼児に読み聞かせることを前提に「亞米利加出版の「リートル」から翻訳した児童書。大阪(天坂)の清規堂から出版する。「ひらかなになしめられは」とあるように、漢字交じりだが総ルビ。和装で、文体は文語体。「画入」だが、絵師は不明。『漢画独稽古』の著書がある今井自身の手にな

るか。全八話中にイソップ寓話が四話含まれている。全話に挿絵が付いている。

今井史山(一八三一～一八八五)は本名今井元雄。江戸生まれで養家に入り紀州で医業を営む。他に『理学字解』(明治八年)、『互通用文章』(明治八年)、『漢画獨稽古』(明治一二年)の著書がある。

1 「一猿と猫との話」4才 (*Aesopica*) James 本、Townsend 本にはなし。Stickney 本の 88 *The Monkey and the Cat* と同話。(絵)

2 「一鼈龜を欺きし話」6才 (A 230) (総)

3 「一遠き慮りして却て近き憂ありし事」14才 (*Aesopica* にはなし)。James 本の 104 *The Country Maid and her Milk-Can* と同話)(絵)

4 「一人を愚弄なせは其身も愚弄さるゝ事」19ウ (A 426) (絵)

加地為也『西洋教の杖』(明治六年九月)

和装にして、岡田屋嘉七即ち東京の尚古堂から発行された。文体は文語体。加地為也(？～一八九四)は渡米経験を持つ洋画家。

「凡例」に「此書は米国サアゼント氏教訓書を主として旁ら諸家の書を搜索し勧懲寓する要件を撮訳し努めて簡約に從かひ童蒙の見聞に備ふ」とある。「サアゼント氏教訓書」が何かを特定するに至っていない。また「卷中略画を雜ゆる者は童蒙をして倦怠しめんことを要すればなり」と、多くの話に挿絵を付ける。西洋を舞台と

した絵柄から推して原本の挿絵を模したものと思われる。画家の名は明示されていないが、加地が画家であるから自身で描いたのではないかろうか。

全五四話中以下の八話がイソップ由来である。

### 卷之一

1 「第十六 朋友に信なくんば非ざる話」(A 65) (絵)

### 二の巻

2 「第一 人利の為に汚名を受し話」(A 67) (絵)

3 「第四 狼と小羊との話」(A 155) (絵)

4 「第十三 物毎につき思慮分別すべき話」(A 43)  
(絵)

### 卷之三

5 「第五 父の遺命を遵守し富を得たる話」(A 42)

6 「第六 己れの分限を知らすして患害を受けたる話」  
(A 91) (絵)

7 「第八 友を撰むは我身を安然にする話」(A 194)  
(絵)

8 「第十七 己の分に安んじ人を羨むまじき話」(A  
230) (絵)

池田亀藏編『修身勧』初篇(明治一九年五月)・次篇(明治一九年一一月)・三篇(明治二二年六月)

三篇三冊だが、それぞれに刊行時期は異なる。大阪の出版社小川畜善館から出される。池田亀藏には『天狗の世の中』(明治一九年)、『粹の世の中』(明治一九年)、『スベリング余師』(明治二〇年)などの編著を同じく

小川畜善館から出している。それ以外は不明。第三篇の奥付には校訂者として大館利一の名が載っている。見開き二ページ分(ときに四ページ分)で話は完結している。全てのページに絵があり、黄表紙のように文と絵とが混在している。絵も見開きで一図となっている。

筆者が見た国立国会図書館本は第三篇の一部が欠けているが、この第三篇を所蔵する図書館は他に確認できない。全七五話中五六話がイソップ寓話。主に『絵入教訓近道』(天保一五二一八四年)、『通俗伊蘇普物語』(明治六年)と大久保夢遊編『伊曾保物語』(明治一九年)に拠っている<sup>注二</sup>。『通俗伊蘇普物語』に依拠した話は初篇・次篇・三篇に出現するのに対し、『絵入教訓近道』に基づくのは初篇に、大久保編『伊曾保物語』に基づくのは次篇に限られる。大久保本は明治一九年二月に春陽堂から出されたばかりであり、挿絵まで真似た同年九月刊行の次篇は急ごしらえといえる。和装本で、主に文語体を用いるが、複数の原本に拠っているので文体に統一性がない。挿絵も原本に基づく場合が多いので、江戸風、明治風、西洋風と区々である。

修身書であることを前面に出すためだろう、多くタイトルとして徳目を掲げる。末尾の教訓にしばしば日本、中国の故事を持ち出す。それが本書の工夫したところなのだろうが、話の内容と必ずしも一致しないケースが多い。例えば初篇の「勉強と怠惰」はよく知られる「アリとキリギリス(ここではセミ)」の話だが、教訓に秦の始皇帝が阿房宮を作った例を挙げるといった具合であ

る。

原拠となつた文献がわかる場合はその旨を記す。

初篇（明治一九年五月）

- 1 「○勉強と怠惰」 1ウ (A 112・37) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「蟻とせみのはなし」に拠る。
- 2 「○人を謀らんとして却て人に謀らる」 2ウ (A 671) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「狐とにはとりのはなし」に拠る。
- 3 「○自慢にほこる時は却て損を招く」 3ウ (A 294) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「くじやくとつるのはなし」に拠る。文は同書のを改変したか。
- 4 「○小鳥の教喻」 5ウ (A 627) (絵)  
文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿二 小鳥の教解の話」に拠る。
- 5 「○後に悔ゆとも及ぶ事無し」 6ウ (A 640a) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「人とかつぱのはなし」に拠る。ただし絵の構図は異なる。
- 6 「○恩を智らさるは獸類よりも劣れり」 8ウ (A 235) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「京都の鼠と田舎の鼠」に拠る。
- 7 「○他人の勧により心を移すこと勿れ」 9ウ (A 352) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「世渡りは下見てくらせ」 10ウ (A 230) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第百四十五 海亀と鷺の話」に拠る。
- 8 「○才は身を守る」 11ウ (A 581) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百五 童子と盜人の話」に拠る。
- 9 「○油断大敵」 23ウ (A 281) (絵)  
文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十八 閩鶴と鷺の話」に拠る。
- 10 「○悪人に善事を勧むれば却て禍を招ぐ」 24ウ (A 156) (絵)  
文・絵ともに『絵入教訓近道』の「狼と鶴のたとへ」に拠る。
- 11 「○過たるは猶及ばざるか如し」 27ウ (A 32) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十六 呪殺人の話」に拠る。
- 12 「○過たるは決して行ふべからず」 25ウ (A 32) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十六 呪殺人の話」に拠る。
- 13 「○拵へたる案山子は鳥も能く之を知る」 26ウ (A 297) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百九十二 嘞過た鼠の話」に拠る。
- 14 「○遠き慮なけれは必ず近きうれひあり」 28ウ (A 124) (絵)  
文は『絵入教訓近道』の「鷦ときつねのはなし」に拠る。
- 15 「○善事は悪事の敵なり」 29ウ (A 122) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十五 盗賊と鶏」の話に扱つて改変する。

17 「○自慢をすれば恥をかくことあるべし」 30 ウ (A 18)

521) (絵)

18 「○道に違ふべからず」 31 ウ (A 203) (絵)

19 「○労すれば巧あり」 32 ウ (A 291) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第五十一 ヘルキユス 権現と車引の話」に扱る。

次篇 (明治一九年一一月)

二三丁裏とあるべき箇所が三三丁裏となつており、以後一〇丁分とぶ。三五丁裏とあるべき箇所が四五丁裏となり、以後さらに一〇丁分とぶ。

20 「金言耳にさかふ」 2 ウ (A 74) (絵)

文・絵ともに大久保夢遊編『伊曾保物語』の「かのしがの事」に扱る。

21 「腹と五体の事」 3 ウ (A 130) (絵)

文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「腹と五体の事」に扱る。

22 「基なき枝に花咲づ」 4 ウ (A 133) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第十八 犬と牛肉の話」に扱る。

23 「信義なくば身を亡す」 5 ウ (A 566) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十六 鳥と獸」との戦の話に扱る。

24 「謫信は身を亡す」 6 ウ (A 9) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二 狐と野羊の話」

25 「入るに易し出るに難し」 7 ウ (A 142) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十七 獅子の病氣の話」に扱り、獅子を猪に変える。

26 「後悔先にたゞ」 8 ウ (A 234) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に扱る。

27 「信無き朋友に交る事勿れ」 9 ウ (A 65) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に扱る。

28 「過分の誇りは身を奢る」 10 ウ (A 472) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第四 呆鴉の話」に扱る。

29 「天賦の貨に非れば身を益せざ」 11 ウ (A 67) (絵)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第八十八 二人の同伴斧を拾ふ話」に扱る。

30 「尺人は一寸なり」 12 ウ (A 370) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第八十九 狐と鶴の話」に扱る。絵は大久保編『伊曾保物語』の「つるときつねの事」に扱るか。

31 「人を謀れば又謀らる」 15 ウ (A 426) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百九 狐と鶴の話」に扱る。絵は大久保編『伊曾保物語』の「つるときつねの事」に扱るか。

32 「樂は苦の種」 16 ウ (A 180) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百十四 馬と荷を負た驢馬の話」に扱る。

33 「誇りは身を亡す」 17 ウ (A 376) (絵)

文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「かいると

- 34 「○勉強は富を得る基」 18 ウ (A 42) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十四 百姓と児輩」  
の話に扱る。
- 35 「父母は天地の如し」 19 ウ (A 1) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第九 鷺と狐の話」に  
扱る。
- 36 「獅子と鼠の話」 21 ウ (A 150) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二十四 獅子と鼠の  
話」に扱る。
- 37 「交るに信無くば終に友を失ふ」 22 ウ (A 35) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第十七 樫夫と山靈」  
の話に扱る。
- 38 「忠臣は二君に仕へず」 33 ウ (A 44) (絵)  
文・絵ともに大久保編『伊曾保物語』の「かはづが  
主君をのぞむ事」に扱る。
- 39 「知なれば愚人とす」 34 ウ (A 384) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第十五 蛙と鼠の話」  
に扱る。
- 40 「慢氣は身を亡す」 46 ウ (*Aesopica* にはない。仮名  
草子『伊曾保物語』の下巻第二七話「かはらけ慢氣  
をおこす事」) (絵)  
文は大久保編『伊曾保物語』の「かはらけ慢氣をお  
こす事」に扱る。
- 41 「○怠者は功をなさず」 1 ウ (A 226) (絵)  
三篇 (明治二一年六月)
- 42 「○君父の命これ従へ」 2 ウ (A 92) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百四 二足の畜犬  
の話」に扱る。
- 43 「○自からなせる禍」はのがれがたし」 3 ウ (A  
276) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十一 鷺と矢の  
話」に扱る。
- 44 「○我本分を守るべし」 6 ウ (A 91) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十六 驢馬と狒狗」  
の話に扱る。
- 45 「○彼のうらみは我身を殺ぐの利刀なり」 7 ウ (A  
51) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十八 農夫と  
蝮蛇の話」に扱る。
- 46 「○人は善惡の友に由る」 8 ウ (A 237) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百七 馬と買客の  
話」に扱つて改変したか。
- 47 「○心こゝへにあらされは過多し」 9 ウ (*Aesopica*  
にはなし。James 本の 104 The Country Maid and her  
Milk-Can と同話) (絵)  
文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第二百六十三  
田舎娘と牛乳壺の話」に扱る。
- 48 「○人をみてわが能を誇りかたる事なけれ」 10 ウ  
(*Aesopica* ' James 本、Townsend 本にはなし。Stickney  
本の 5 The Drum and the Vase of Sweet Herbs と同話)  
(絵)

49 「○事々物はその恩を思へ」 12ウ (A 175) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第百五十九 旅人と楓樹

の話」に拠る。

50 「○一事の失錯他事に及ぶ」 13ウ (A 214) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第百五十二 土撥鼠の

母と児の話」に拠る。

51 「○足ることを知れ」 15ウ (A 117) (絵)  
「○徳行を磨けよ」 17ウ (A 499) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿八 男児と

女児の話」に拠る。

53 「○人を計れば我亦人にはからる」 26ウ (A 562a)  
(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿七 狐と鶴

の話」に拠つて改変する。

54 「○虚妄を云へば即ち人に嘲けらる」 28ウ (A 14)  
(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十 猿の自慢

の話」に拠つて改変する。

55 「○人の運はその身の行為に従ふ」 31ウ (A 174)  
(絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百十四 旅人と運

の神の話」に拠つて改変する。

56 「○耐忍すれば不幸も幸福となる」 33ウ (A 218)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿五 牝猿と

犬の話」に拠つて改変する。

青木富士『通俗絵入学芸独案内』(明治二〇年五月)  
青木富士『日本西洋昔嘶』(明治二〇年五月)

『通俗絵入学芸独案内』は「三府繁盛記」「新体詩歌」

といつた最新知識や作文の書き方を記した啓蒙書である。この本の中に、上段に「西洋昔嘶」二〇話、下段に「日本昔嘶」六話を掲載した部分がある。この東西の昔嘶を、そのままの版で独立させて同時に出したのが『日本西洋昔嘶』である。

「西洋昔嘶」二〇話はすべてイソップ寓話である。「日本昔嘶」を含め、昔嘶にはすべて挿絵が付いている。本文は文語体で、漢字はほぼ總ルビである。

青木には他に『正則英語自在』(明治一九年)、『英語早学』(明治二〇年)、『作文独案内』(明治二〇年)、『交際必携西洋礼式』(明治二〇年)等の編著があり、全て大阪の出版社嵩山堂から刊行されている。「出版人」が青木自身となつてるので、青木が創設した出版社であろう。「嵩山」の社名も「青木富士(青き富士)」と符合する。

1 「鹿が誇りて命を失し話」 1 (A 74) (絵)  
2 「蟻と蟲の話」 2 (A 112・373) (絵)

3 「狐と鳥の話」 4 (A 124) (絵)

4 「狼と鶴の話」 6 (A 156) (絵)

5 「猫と雄の話」 8 (A 16) (絵)

6 「狼と獅子の話」 10 (A 347) (絵)  
7 「野兔を追ふ獵犬の話」 11 (A 331) (絵)

「猿と駱駝の話」 14 (A 83) (絵)

「游泳する小児の話」 16 (A 211) (絵)

「婦人と牡鷄の話」 17 (A 58) (絵)

「人とサザーヤの話」 18 (A 35) (絵)

「蛙が王を懇請する話」 20 (A 44) (絵)

「驢馬と馴者の話」 23 (A 186) (絵)

「猿と海豚の話」 24 (A 73) (絵)

「驢馬と狼の話」 27 (A 187) (絵)

「熊と二個の旅人の話」 29 (A 65) (絵)

「鼠と蛙と鷺の話」 31 (A 384) (絵)

「喇叭子が俘虜にせらる話」 33 (A 370) (絵)

「病める鹿の話」 35 (A 305) (絵)

川田孝吉『小学生徒教育昔噺』第一卷～第五卷 (明治二〇年七月)・第六卷 (明治二〇年一月)・第七卷 (明治二一年一〇月)

小学生向けに、修身の徳目に合う話を集め編集した書。

全七巻七冊の和装本。刊記に従えば第五巻までは「明治二十年七月出版」、第六巻は「明治二十一年十月出版」、

第七巻は「明治二十一年十一月出版」である。明治二〇年一〇月に第一・二巻、第三・四巻、明治二〇年一一月に第五・六巻と二巻ずつ洋装仕立てに合冊されても出版されているが、版は同じ。川田は松廻家緑の号をもつ。文

体は文語体。第四巻は六話を収めるが、他は各編五話で構成されている。全話に挿絵が付いている。全三六話中三二話がイソップに由来する。東京の開文堂書舗から出

版される。川田は啓蒙的な著書をいくつか持つ。

## 第一巻

「豪家の主人馬を察る話」 1ウ (A 237) (絵)

「壯年の男薬罐となる話」 2ウ (A 31) (絵)

「野馬の踊舞不興となる話」 3ウ (A 83) (絵)

「太陽と風の神との争論話」 4ウ (A 46) (絵)

「偶郎驚怖て席上を逃る話」 5ウ (A 33) (絵)

「鶏の頓才危難を逃る話」 6ウ (A 562a) (絵)

「乗馬と田舎馬とのはなし」 7オ (A 357. 565) (絵)

「鼠と蛙災厄に罹るはなし」 8ウ (A 384) (絵)

「父一人の小童を教訓する話」 9ウ (A 499) (絵)

「小童と金平糖のはなし」 10ウ (Aesopica にはない。James 本の 172The Boys and the Fiberts と同話) (絵)

## 第二巻

「小童人を誑して焼死ぬ話」 11ウ (A 210) (絵)

「鼠猫難を避んと集会する話」 12オ (A 613) (絵)

「多くの蛙小童に殺さる話」 13ウ (Aesopica にはない。James 本の 172The Boys and the Frogs と同話) (絵)

「狐獅子を輕侮て裂れる話」 14オ (A 10) (絵)

「旅人垂眠して豁へ陥らんとする話」 15ウ (A 174) (絵)

「狼乳母に誑されて空く山へ帰る話」 16ウ (A 158) (絵)

## 第三巻

「小童人を誑して焼死ぬ話」 11ウ (A 210) (絵)

「鼠猫難を避んと集会する話」 12オ (A 613) (絵)

「多くの蛙小童に殺さる話」 13ウ (Aesopica にはない。James 本の 172The Boys and the Frogs と同話) (絵)

「狐獅子を輕侮て裂れる話」 14オ (A 10) (絵)

「旅人垂眠して豁へ陥らんとする話」 15ウ (A 174) (絵)

「狼乳母に誑されて空く山へ帰る話」 16ウ (A 158) (絵)

17 「蠅吸飲すぎて命を失はんとする話」 4才 (A 80)

18 「鶴の鳥田鶴と遊んで災難に遇ふ話」 4ウ (A 194) (絵)

19 「傘やと煉化工の妻雨天の喜憂話」 6才 (A 94) (絵)

20 「小魚釣師を謀らんとする話」 7才 (A 18) (絵)

21 「虎と牛と競争をする話」 1ウ (A 226) (絵)

22 「商家の丁稚盜人を謀る話」 3才 (A 581) (絵)

23 「獵犬が鹿を追かけるはなし」 4ウ (A 331) (絵)

24 「鳥と獸と戦争をする話」 5ウ (A 566) (絵)

25 「怠惰もの福の神を祈る話」 7才 (A 174) (絵)

第六卷

26 「驢馬。洋犬の真似をして打倒さる話」 1ウ (A 349)

27 「賊人の賄賂。飼犬に察せらるはなし」 3才 (A 403)

28 「亀の子。虚空より落ちて。命を失ふ話」 5才

91 (A 230) (絵)

29 「洋灯大言して風に吹き消さるゝ話」 1ウ (A 349)

30 「農夫仏神を祈りて車を動かさんとする話」 2ウ

(A 291) (絵)

31 「狐我子多きに誇りて獅に怒らるゝ話」 5ウ (A 257) (絵)

第七卷

32 「蚊が牛に言ふて却て嘲弄せらるゝ話」 7才 (A 137) (絵)

綾部乙松『小学生徒修身教育昔話』(明治二〇年一〇月)

これも小学生向けに、修身の徳目に合う話を集め編集した書。発行者は東京の瀬山佐吉。綾部乙松は梅廻家馨の号を持つ。刊記には「陵部乙松」とあるが、他の著書には「綾部」とあるので、「陵」は誤字であろう。和装本。文体は一部口語体もあるが原則的には文語体。全六話に挿絵が付いている。その中の四話がイソップに由来するが、いずれも改変を施している。川田孝吉『小学生徒教育昔話』とは書名、著者の号、本の作りも類似しており、両者は何らかの関係があるかと想像されるが、現在のところ不明である。

綾部は啓蒙的な著書をいくつか持ち、その中には英語関係の書もあるが、いずれも単語帳のようなものであり、どの程度の英語力を有していたのかはわからない。

1 「○蜜蜂と蜻蛉の話」 7 (A 112・373) (絵)

2 「○鳥合戦の話」 9 (A 566) (絵)

3 「○蠅と蜘蛛の話」 12 (A 521) (絵)

4 「○馬と犬の話」 14 (A 565) (絵)

大館利一『修身之教』(明治二一年五月)

この時期多く出版された小学生向け修身寓話集の一つ。発行者は大坂(大阪)の安井兵助。大館利一も大坂の人。文体は文語体。大館は先に挙げた池田亀藏の『修

身勧』第三篇の校訂者でもある。手品の種本、歴史書、

字引など多ジャンルに亘る啓蒙書や実用書の編者ともなっているが、その内容は浅く、通俗書の域を出ない。

各話は見開き二ページで完結し、挿絵が付く。全三八話中二三話がイソップに由来する。多くは『通俗伊蘇普物語』に依拠している。修身書であるので、『徳目をタイトルとする。

1 「○其器なければ則ちその位に居るべからず」 10

(A 81) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十三 狐と猿の話」に拠る。

2 「○不明瞭なるは实行しがたし」 12 (A 43) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十二疋の蛙移住の話」に拠る。

3 「○狡猾なるものと与に語るべからず」 20 (A 12) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十四 射術の達人と獅子の話」に拠る。

4 「○勇進せよ」 24 (A 340) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十四 射術の達人と獅子の話」に拠る。

5 「○人見て法説け」 38 (A 35) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十九 福神と彫像工の話」に拠る。

6 「○おほきものは人に見すてらる」 40 (A 73) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百十九 福神と彫像工の話」に拠る。

7 「○祈る暇あれば働け」 42 (A 285) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百十九 福神と彫像工の話」に拠る。

8 「○悪人はよく非を理に云ひなす」 46 (A 155) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十一 老婆と医者の話」に拠る。

9 「○人は身勝手」 48 (A 17) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十 無尾狐の話」

に拠る。

10 「○悪友には決して交るべからず」 50 (A 237) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十一 老婆と医者の話」に拠る。

11 「○飲食の交りは害あり」 52 (A 305) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十一 老婆と医者の話」に拠る。

12 「○小黠するものは大黠に計られます」 54 (A 57) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十一 老婆と医者の話」に拠る。

13 「○身分不相応の威をふるふは禍にあふの基」 56 (AESOPICA) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十七 驢馬の自慢の話」に拠る。

14 「○知らぬ事を知りがほにする」 58 (A 355699) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十九 信の神と旅人の話」に拠る。

15 「○嘆はしいかな詐術の跋扈」 60 (A 355699) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百三十九 信の神と旅人の話」に拠る。

16 「○惡るい性質ははやくより知るゝ／＼しみ給へや各位」 66 (A 37) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十八 盲人と狼の話」に拠る。

17 「○前門虎口をのがれ後門獅子に遇ふ」 80 (A 76) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百十六 鹿と獅子の話」に拠る。

18 「○新もの嗜失敗」 82 (A 6) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十六 山野羊を取失つた野羊飼の話」に拠る。

19 「○己の本分を守れ」 84 (A 139) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百六十六 山野羊を取失つた野羊飼の話」に拠る。

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十一 海鷗と鳶

の話に扱る。

「○我身つめつて人の痛さを知れ」 86 (A 414) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿三 猫夫の話」に扱る。

「○不顯者の自負」 88 (A 213) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二百四十七 覆盆子の話」に扱る。

「○他人の食寄する勿れ」 120116 (A 305) (絵)

「○その身の本分を知れ」 120116 (A 83) (絵)

「○他人の食寄する勿れ」 120116 (A 83) (絵)

「○その身の本分を知れ」 120116 (A 83) (絵)

日置岩吉『小学生徒修身教育斬』第一編(明治二一年六月)・第二編第三編(明治二一年九月)・第五編(明治二一年一月)

これも小学生向け修身寓話集。文体は文語体。大阪の赤志忠雅堂刊。奥付に「著作兼発行者」として日置の名が載っているので、赤志忠雅堂は日置の創設した出版社かと推定される。日置については同社から明治二、二年に運動遊戯本やら音曲本やらを出しているのが知られるだけである。

第二編・第三編は合冊となっている。第四編は所在不明につき未見。いくつかには挿絵が付いている。ソツブに由来するのは、第一編全二二話中一九話、第二編全一〇話中八話、第五編全一〇話中四話である。第三編は目録によれば全一四だが、筆者が見た国立国会図書館本は二話の本文のみで、他は欠けている。

第一編(明治二一年六月)

「○虎と他の獸と狩に出た話」 2 (A 499) (絵)

「○父男女子に教示するの話」 2 (A 499) (絵)

「○些少の恩も忘べからざる話」 4 (A 175) (絵)

「○獅子と鯨と盟をなす話」 6 (A 145) (絵)

「○鹿と海との話」 7 (A 168) (絵)

「○狼と野羊を欺す話」 9 (A 157) (絵)

「○老父と姉妹の処女の話」 11 (A 94) (絵)

「○蝶々大象の頭に止る話」 15 (A 378) (絵)

「○鉢酒空壠の話」 16 (A 493) (絵)

「○狼虚言を知らざる話」 17 (A 158) (絵)

「○鹿恩を忘て殺さるゝ話」 18 (A 77) (絵)

「○農夫時計を失なふ話」 19 (A 55) (絵)

「○運の神の話」 20 (A 174) (絵)

「○剛臆は危難に臨と分る話」 22 (A 326) (絵)

「○栗鼠の美声を感ずる話」 23 (A 184) (絵)

「○危急を助は論に及ぬ話」 25 (A 211) (絵)

「○狐獅子へ奉仕する話」 26 (A 394) (絵)

「○驢馬の失錯の話」 27 (A 180) (絵)

「○正直者益を得る話」 2 (A 173) (絵)

「○我愁ければ他つらしの話」 4 (A 414) (絵)

「○蝙蝠禽鳥畜獸に憎るゝ話」 7 (A 566) (絵)

- 舞台設定を変えていくが、偶然とは思われない程に類似の文、表現が使われているからである。いくつかの話を除けば、『通俗伊蘇普物語』の改作本といつてもよい。
- 大館が利用し得た『通俗伊蘇普物語』には再版（明治八年）もあるが、初版（明治六年）に扱っていることが、八年）と狼のはなし」から判明する。これは渡部温が初版で *kid* を *kite* と誤読し、「鳶」と訳してしまったもので、再版では訂正している。
- 1 「●熊の入婿のはなし」 5 (A 140) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十二 獅子の恋慕の話」に扱る。
- 2 「●警察 察署にすむ雀の話」 8 (A 227) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十六 裁判所に住む燕の話」に扱る。
- 3 「●羊飼と羊のはなし」 14 (A 212) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百五十四 蕎婦と綿羊の話」に扱る。
- 4 「●蠟燭の火の話」 21ノ5 (A 349) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十三 灯火の話」に扱る。二一ページだが「21ノ5」とあり、次は二六ページとなる。
- 5 「●片目の鹿の話」 26 (A 75) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第三十四 片眼の鹿の話」に扱る。
- 6 「●鷺と鷹の話」 28 (A 62) (絵)
- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第四十 海豚と鱸魚の話」
- 第三編（明治二年九月）
- 28 「○飾りより実用の話」 2 (A 74)
- 第五編（明治二一年一月）
- 29 「○言の曖昧信を失ふ話」 5 (A 35) (絵)
- 30 「○貨幣を産む鶴の話」 11 (A 87) (絵)
- 31 「○星学者足下の難を知らざる話」 14 (A 40) (絵)
- 32 「○高木風に憎るゝ話」 15 (A 70)
- 大館利一『西洋日本昔々』（明治二一年九月）
- 大坂（大阪）の文欽堂から発行された。発行者が大館自身になっているから、文欽堂は大館の創立した出版社か。
- 上段に「日本はなしの部」四四話、下段に「西洋はなしの部」四〇話を載せる。書名といい、体裁といい青木富士の『日本西洋昔々』に酷似するので、これを模倣したことと思われるが、採用された話は、日本のも西洋のも大きく異なる。「ます」を用いた口語体。殆どの話に挿絵を付ける。
- 「西洋はなしの部」四〇話中、三四話がイソップに由来する。大館には先に挙げた『修身之教』があるが、両者に共通するイソップ寓話はない。殆どが『通俗伊蘇普物語』に依拠していると思われる。しばしば登場動物や

に扱り、登場動物を変える。

7 「●牛乳と蠅とのはなし」 29 (A 80) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第二十 蠅と蜜蠍の話」に扱る。

8 「●鳶と狼のはなし」 30 (A 98) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』初版の「第八 鳶と狼の話」に扱る。これにより、初版に依拠していることがわかる。

9 「●狼と猿とのはなし」 32 (A 157) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十七 断崖の上に立た野羊の話」に扱る。

10 「●痴息と生垣のはなし」 33 (*Aesopica* にはない。James

本の 161 *The Hedge and the Vineyard* と同話) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十四 樹墻と葡萄園の話」に扱る。

11 「●羊の皮を着た狼の話」 35 (A 451)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十七 羊の皮を着た狼の話」に扱る。

12 「●駱駝のはなし」 36 (A 287) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十一 亞刺比亞人と駱駝の話」に扱る。

13 「●羊と豚のはなし」 37 (A 85) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百八十三 豚と羊の話」に扱る。

14 「●獅子と狼のはなし」 40 (A 347) (絵)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百九十四 狼と獅子の

話」に扱る。

15 「●駄賀馬と乗馬とのはなし」 42 (A 357) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百一十五 乗馬と驢馬の話」に扱る。

16 「●草と鹿とのはなし」 44 (A 77)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十六 鹿と野葡萄の大魚と小魚の話」に扱る。

17 「●網にかかる魚のはなし」 47 (A 282)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百二十一 大魚と小魚の話」に扱る。

18 「●片いちわるき馬と馬子のはなし」 48 (A 186)

文・絵ともに『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十五 驢馬と圉夫の話」に扱る。

19 「●大陽の嫁とりのはなし」 50 (A 314) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十一 日輪の妻迎馬の話」に扱る。

20 「●黄金の卵をうむ鶏のはなし」 52 (A 87) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十九 日輪の妻迎卵を産む話」に扱る。

21 「●象と蚊のはなし」 54 (A 137)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十九 蚊と牛の話」に扱る。

22 「●虎と他獸のはなし」 55 (A 51) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十四 獅子王と相談獸の話」に扱る。

23 「●虎と獅子とのはなし」 56 (A 338) (総)

文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十四 獅子王と相談獸の話」に扱る。

- 文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十八 獅子と野羊の話」に扱る。
- 24 「●獅子にかまれた狼のはなし」 58 (A 160) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十一 犬に噛れた狼の話」に扱る。
- 25 「●松と芒とのはなし」 60 (A 70) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第六十五 橡樹と蘆の話」に扱る。
- 26 「●羊を誑誘る狐のはなし」 62 (A 191) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第九十四 驢馬を誑誘る狐の話」に扱る。
- 27 「●星学者のはなし」 64 (A 40) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第百十八 天文者の話」に扱る。
- 28 「●女羊と狼のはなし」 65・77 (A 97) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第百二十一 牝野羊と狼の話」に扱る。六五ページは「六十五」「七十七」と二つのページ付けがあり、次ページは「七十八」と続く。
- 29 「●海と川のはなし」 80 (A 412) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百二十三 河と海の話」に扱る。
- 30 「●鉄瓶と急須と同行するはなし」 82 (A 378) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第七十五 一雙の壺の話」に扱る。
- 31 「●矢の束のはなし」 84 (A 53)
- 32 「●老ぼれた虎のはなし」 102 (A 481) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第一百九十五 老衰の獅子の話」に扱る。
- 33 「●虚言をつく小児のはなし」 104 (A 210) (絵)  
文は『通俗伊蘇普物語』の「第三十 牧童と狼の話」に扱る。
- 34 「●雀と農夫とのはなし」 107 (A 325) (絵)
- 和田万吉『家庭教育修身はなし』(明治二三年七月)に記載される。これも修身書の一つ。母親が子に本を示している絵が表紙に描かれているので、児童自身が読むと共に、親が子に読んで聞かせることも意図しているのであろう。角書きの「家庭教育」もその意図を含むものと思われる。東京の双々館から刊行される。文語体。和田万吉(一八六五~一九三四)はこれを出版した明治二三年に東京帝國大学文科大学国文科を卒業し、後に同大学附属図書館長となり、図書館学の先駆者として知られる人物。
- 全四八話中七話がイソップ寓話に基づく。
- 1 「○吝嗇な人の話」 6 (A 225) (絵)  
2 「○蟹の親子の話」 26 (A 322)  
3 「○蜂と鳩とのはなし」 32 (A 235) (絵)  
4 「○漁師と小魚との話」 57 (A 18)
- 5 「○水車師と駱駝とのはなし」 64 (*Aesopica* にはない。Stickney 本の 97 The Arab and his Camel と同話) (絵)

6	「(○かふもり (蝙蝠) のはなし 第一」	71 (A 566)
7	「(○熊と二人の旅行者との話」	86 (A 65)
13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	『尋常小學生徒教育』は「はなしの部」「孝子の部」「歴史門」「演説の部」「祝文」から成る学習書。「はなしの部」を版もそのままに独立させ、序文を付け加えて翌年『尋常小學生徒修身話』と題して出版する。いずれも大阪の浜本明昇堂刊。全四〇話の中に、イソップ寓話が二五話含まれている。地の文は文語体だが、会話は口语体。西野は修身、作文などの教育書を浜本明昇堂から出版している。	西野正勝『尋常小學生徒教育』(明治二四年七月) 西野正勝『尋常小學生徒修身話』(明治二五年一月)
18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	『尋常小學生徒教育』は「はなしの部」「孝子の部」「歴史門」「演説の部」「祝文」から成る学習書。「はなしの部」を版もそのままに独立させ、序文を付け加えて翌年『尋常小學生徒修身話』と題して出版する。いずれも大阪の浜本明昇堂刊。全四〇話の中に、イソップ寓話が二五話含まれている。地の文は文語体だが、会話は口语体。西野は修身、作文などの教育書を浜本明昇堂から出版している。	西野正勝『尋常小學生徒教育』(明治二四年七月) 西野正勝『尋常小學生徒修身話』(明治二五年一月)
18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	『尋常小學生徒教育』は「はなしの部」「孝子の部」「歴史門」「演説の部」「祝文」から成る学習書。「はなしの部」を版もそのままに独立させ、序文を付け加えて翌年『尋常小學生徒修身話』と題して出版する。いずれも大阪の浜本明昇堂刊。全四〇話の中に、イソップ寓話が二五話含まれている。地の文は文語体だが、会話は口语体。西野は修身、作文などの教育書を浜本明昇堂から出版している。	西野正勝『尋常小學生徒教育』(明治二四年七月) 西野正勝『尋常小學生徒修身話』(明治二五年一月)
18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	『尋常小學生徒教育』は「はなしの部」「孝子の部」「歴史門」「演説の部」「祝文」から成る学習書。「はなしの部」を版もそのままに独立させ、序文を付け加えて翌年『尋常小學生徒修身話』と題して出版する。いずれも大阪の浜本明昇堂刊。全四〇話の中に、イソップ寓話が二五話含まれている。地の文は文語体だが、会話は口语体。西野は修身、作文などの教育書を浜本明昇堂から出版している。	西野正勝『尋常小學生徒教育』(明治二四年七月) 西野正勝『尋常小學生徒修身話』(明治二五年一月)

大館利一『児童教育知恵宝』(明治二四年七月)  
手紙の書き方やら計算法、絵の描き方などを記した初步的な学習書。発行者は大阪の刀根松之助。その中に「修身のをしへ」という項目があり、動物寓話を七話載せる。そのうち六話がイソップ寓話に基づく。この六話は、先に挙げた大館の『修身之教』と共通するが文は同一ではない。文語体で各話に挿絵が付く。絵は『修身之教』によく似る。徳目をタイトルとするのも同様。

16	「(○水車師と駱駝との話」	23 ( <i>Aesopica</i> はない。仮名草と同話)
25 24 23 22 21 20 19 18 17	Stickney 本の 97 「The Arab and his Camel」と同話)	和田万吉『家庭教育修身はなし』の「水車師と駱駝とはなし」とほぼ同文。
25 24 23 22 21 20 19 18 17	Stickney 本の 97 「The Arab and his Camel」と同話)	和田万吉『家庭教育修身はなし』の「水車師と駱駝とはなし」とほぼ同文。
25 24 23 22 21 20 19 18 17	Stickney 本の 97 「The Arab and his Camel」と同話)	和田万吉『家庭教育修身はなし』の「水車師と駱駝とはなし」とほぼ同文。
25 24 23 22 21 20 19 18 17	Stickney 本の 97 「The Arab and his Camel」と同話)	和田万吉『家庭教育修身はなし』の「水車師と駱駝とはなし」とほぼ同文。

「修身のをしへ」

1 「●人は身勝手」 10 (A 17) (絵)

2 「●偽をつくものは人に見捨らる」 10 (A 73) (絵)

3 「●己が本業を守れ」 12 (A 139) (絵)

4 「●己不相応の威をふるふは禍のもと」 12

(Aesopica にはない。仮名草子『伊曾保物語』の中

卷第四〇話「獅子王と驢馬の事」と同話) (絵)

5 「●狡猾なものと共にかたるべからず」 14 (A 12)

(絵)

6 「●他人の喰より」 14 (A 305) (絵)

### 木原季四郎『子供のをしえ』(明治二十四年八月)

東京のやまと新聞社刊。「ます」を用いた口語体。木原についてはこの本の編者以外の事跡は全く不明である。教訓的な話や行儀作法を収める。全二七話のうち三話がイソップ寓話の改作である。

1 「◎虱と蚕の駆競」 4 (A 226)

これは後述の瘦々亭骨皮道人『面白叢談』の「子供衆のお耳を挙げ」とほとんど同文。

2 「◎虚言は信を失ふの基」 5 (A 210)

3 「◎鷹と雀」 9 (A 10)

小池清『通俗修身談』(明治二十四年一〇月)

西村寅二郎『教育修身談』(明治二十五年一月)

西村寅二郎『教育修身美談』(明治二九年三月)

小池清の『通俗修身談』は名古屋の共同出版社刊。小

池も名古屋在住者。修身の役に立つ話をまとめて一書としたもので、「寓意修身話」三九話、「修身正話」三六話から成る。前者のうち一七話がイソップ寓話。後者は主に日本、中国、ヨーロッパの歴史上の逸話を採る。地の文は文語体だが、会話は口語体。一八九〇年前後に「小池清」の著作がいくつかあるが、同一人物かは確かにない。それ以外は不明。

西村寅二郎の『教育修身談』は東京の東雲堂刊。『通俗修身談』と全く同内容。『通俗修身談』と同版に見えるほどそつくりの文字面だが、詳細に比べると異体の仮名の使用に差異がある。

西村の『教育修身美談』は東京の大日本図書出版社刊。『教育修身談』を改題しただけのもの。版も同じ。

西村は一八九〇年代に都々逸、端唄などの本をいくつか出している。文廬家主人を称する。それ以外は不明。

同一書が別編者の名で出版された事情は不明である。

イソップからの一七話の多くは仮名草子『伊曾保物語』に依拠する。依拠した『伊曾保物語』中の話は、すべて明治一九年に刊行された大久保夢遊編『伊曾保物語』に掲載されているので、おそらく大久保編本に基づくのであろう。

1 「●蟻と蠅との話 (勤儉)」 3 (A 112・373) (絵)

2 「●馬と馬丁との話 (点詐)」 7 (A 319)

3 「●人を殺して一身を失ひし話 (敗徳)」 7 (A 32)

4 「●蝙蝠と鼬との話」 13 (A 172)

5 「●蜂と蟋蟀との話」 30 (A 112・373)

- 6 「●狐と鶴との話（利己）」 36 (A 671)  
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第三五話「庭鳥と狐」との事」とほぼ同文。
- 7 「●猿と犬との話（克信）」 38 (A 218)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第二六話「猿と犬との事」とほぼ同文。
- 8 「●蠅と蟻との話（悔輕）」 39 (A 521)  
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第二八話「蠅と蟻との事」とほぼ同文。
- 9 「●五体と腹との話（扶翼）」 40 (A 130)  
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第三六話「腹と五体の事」に拠り、多少表現を変える。
- 10 「●鷺と鴉との話（殘忍）」 41 (A 2)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一二話「鷺と鳥の事」に拠り、多少表現を変える。
- 11 「●愚人怒りて神体を打碎きし話」 42 (A 285)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一五話「ある人仏を祈る事」に拠る。ただし、像をこわす場面を欠いているため、理解不能の話となっている。
- 12 「●狼と羊との話（貪婪）」 43 (A 155)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一七話「鼠の談合の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 13 「●鼠の集会（実行）」 50 (A 613)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一七話「鼠の談合の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 14 「●鳩と鷺との話（嚴肅）」 51 (A 486)  
 仮名草子『伊曾保物語』の中巻第二六話「鷺と鳩の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 15 「●狐と鶴との話（反爾）」 52 (A 426)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第三一話「鶴と狐の事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 16 「●雀と人間との話（博愛）」 54 (A 627)  
 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第三二話「鳥人に教化をする事」に拠るが、表現はかなり変える。
- 17 「●瓦盆と驟雨との話（聰淑）」 56 (*Aesopica* にはない) 仮名草子『伊曾保物語』の下巻第一七話「かはらけ慢氣をおこす事」
- 佐藤治郎吉『少年書類新伊蘇普物語』(明治二十五年三月) 東京の博文館刊。文語体。佐藤は『少年宝庫日本男児』(東京堂、明治二十四年)といつた本も出している。

「新伊蘇普」と称したのは新たに創作したイソップ風の動物寓話の意味である。従つてイソップ寓話そのものはないはずであるが、次の一話はイソップに依拠していく。

「(六六) 報恩は負債の償還なり」(A 235)(絵)

鎌田淵海『少年仏教修身はなし』(明治二十五年三月)

京都の顕道書院刊。口語混じりの文語体。一鎌田淵海

口演「顕道居士筆記」とある。鎌田は淨土真宗の僧侶と思われる。仏教関係の著書が多数ある。「顕道居士」は「編輯兼発行者」として名が奥付にある松田甚左右衛門であろう。初版は漢字平仮名表記本であるが、同書院から明治二五年七月に漢字片仮名表記本でも刊行されてい る。ただしこちらは漢字平仮名本の四三ページ三行目該当部分までで終わっている。

書名にあるとおり、少年向けに寓話で仏教の教説を説く。附録を除いた全二五話の中にイソップに依拠して改変した話が二一例ある。すべて挿絵が付く。ページは準

7	6	5	4	3	2	1
鳥 と 獣 の 話 」	遷 仏 会 の 牛 の 話 」	せん ぶつ かい の うし の はなし 」	に かに が ひき に はなし 」	「 薦 め る 小 鼠 の 話 」	ねこ ねこ こねこ だま はなし 」	「 猫 と 鼠 の 話 」
12	(A 289)	(A 182)	(A 124)	4	(A 133)	1 (A 613)
14	(A 182)	(A 566)	(A 124)	7	(A 324)	(絵)
16	(A 566)	(A 566)	(A 124)	9	(A 324)	(絵)
						(絵)

森下亀太郎『家庭教育日本修身談』（明治二十五年四月）大阪の積善館刊。口語体。森下亀太郎（一八六九—一九四六）は岡山出身。明治二七年に明治法律学校を卒業し、判事、検事を歴任した後、大阪で弁護士となる。後には衆議院議員にもなる。この書を出版した当時はまだ明治法律学校の学生であった。

本書は吉見経綸閣とある。前年の一〇月に交付された教育勅語を冒頭に載せる。一話だけイソップに基づく。森下の号は「黄薇」と記されている。本書と同じ積善館から明治二四年一二月に刊行された『家庭教育小学修身はなし』『家庭教育幼年修身はなし』の著者、渡辺松

茂の号も「黄薇」である。ほぼ同時期に同じ出版社から出した同種の図書の著者の号が一致するのは偶然とは思われないが、森下と渡辺の関係は詳らかにできない。なお、渡辺の二著は事实上イソップ寓話集なので、この小論の対象とはならない。

「○のみ 蛋と虱」 44 (A 226)

秋元政『教育幼稚の宝』(明治二五年五月)

東京の金桜堂刊。秋元は発行者としても名が載っているから、金桜堂は秋元の創設した出版社と思われる。「ます」を使った口語体。秋元について不明。

『教育幼稚の宝』は「新教育演説」など一八の題目から成り、個別にページ付けがされている。それぞれに序文があり、記された年月は明治二三年四月から明治二五年四月に亘る。これらの事実から推すと、個別に出版された一八種の本を『教育幼稚の宝』の名で合冊して刊行し直したものであろう。各題目は全二一話から成る。各話は見開き右ページに納まており、左ページに挿絵が付く。いくつかの題目にはイソップ由来の話が含まれている。以下題目の後に括弧で記したのは序文の年月である。

「新教育演説」(明治二三年一一月)

1 「○石物言ふ世の中」 16 (A 207) (絵)

絵はあるが、内容とは無関係。

2 「○力の及ぶ所に非らずして為すは愚なり」 34 (A)

135 絵  
絵はあるが、内容とは無関係。

3 「○我れ人に善を為せば人亦我れに善を為す」 40 (A)

235 (絵)

4 「○人の風を見て我が体を直せよ」 44 (A 347) (絵)

5 「○知らざるは知らずとせよ」 46 (A 203) (絵)

6 「○のみ 蛋と虱の駆<sup>く</sup>競」 28 (A 226) (絵)

7 「○月の衣服奇談」 40 (A 468) (絵)

8 「○立樹の怨言」 42 (A 302) (絵)

9 「少年必携子供伊蘇普」(明治二五年四月)

10 「○鶏の金言」 10 (A 503) (絵)

11 「○日輪と風の力比べ」 16 (A 46) (絵)

12 「○獅子の眞似をする驢馬の話」 18 (A 188)

13 「○偽飾は剥げる赤禿頭の髪の話」 20 (A 375) (絵)

14 「○不用に見えても不用ならぬ樹牆の話」(Aesopica ではない。James 本の 161 The Hedge and the Vineyard にはない。

15 「○處飾(ママ)よりは実用を取り鹿の話」 24 (A 74) (絵)

16 「○我身を捨て人の痛さを知る獅子の話」 26 (A)

17 「○處飾(ママ)よりは実用を取り鹿の話」 24 (A 414) (絵)

18 「○孔雀と鶴の着物争ひ」 28 (A 294) (絵)

- 18 「○影を掴みて実を失ふ犬の譬話」<sup>34</sup> (A 133) (絵)
- 19 「○蔭で威張者は本場に臆す狩人の話」<sup>42</sup> (A 326) (絵)
- 「少年必携教育幻灯会」(明治二三年一〇月)
- 20 「○孔雀の真似をする鳩の譬話」<sup>10</sup> (A 472) (絵)
- 21 「○証拠は口なくして有体を陳ず」<sup>20</sup> (A 280) (絵)
- 22 「○恩知らずの末路」<sup>28</sup> (A 77) (絵)
- 23 「○交り深過ぎて不礼を為す」と勿れ」<sup>32</sup> (A 10) (絵)
- 24 「○急ぐ事は静かにす可し」<sup>34</sup> (A 201) (絵)
- 25 「○児輩よ悪遊をすること勿れ」<sup>40</sup> (*Aesopica* に  
はない。James 本の 172 *The Boys and the Frogs* と同  
話) (絵)
- 26 「○鳥刺と山鳥の戒め話」<sup>44</sup> (A 265) (絵)
- 「小学生徒少年俱楽部」(明治二四年六月)
- 27 「○昔話鼠の歎息」<sup>24</sup> (A 24) (絵)
- 「少年教育智恵かゞみ」(明治二三年一〇月)
- 28 「○狐の黠智」<sup>44</sup> (A 124) (絵)
- 29 「○鴉の頓方(ママ)瓶の水量を増すの話」<sup>46</sup> (A 390) (絵)
- 「少年必携教育一口話」(明治二五年四月)
- 30 「○手前勝手多き世の中」<sup>44</sup> (A 67) (絵)

**堀三友・秋野繁吉『伊蘇普実伝』(明治三二年二月)**  
 本書は明治三二年二月に東京の救済新報社から、同年一二月に東京の文学同志会から出版されるが、版は同一

である。ただし新報社版は序文が松村介石、五十嵐喜広、堀三友の順だが、文学同志会版は五十嵐、堀、松村の順。文学同志会版の表紙はあるうことか、「伊蘇普戯伝」となつている。「伊蘇普実伝」に続いて「仏蘭西ヴォルテ」ル氏原著」を「羽陽散士」が翻訳した「曼能」が合綴されている。「羽陽散士」については何の説明もないが、「羽陽」即ち山形の出身である堀であろう。

### 内題に「法学士 故堀三友／帝国大学生 秋野繁吉

共編」とある。文学同志会版の表紙に「法学博士 堀三友／帝国大学 秋野繁吉」とある。堀が生前法学博士号を得ていたのならば、内題にも「博士」を謳うはずであろうから、実際に博士号を得ていたのか疑問が残る。堀には法学関係の著書、訳書がある。

### 【堀三友の序文】

伊蘇普ハ。蘇玖拉的。亞利斯底的。孔丘。黃老輩ト比肩疋適ス可キ古ノ聖人ナリ。蓋シ氏ノ聖智ハ生命ト共ニ之ヲ天ニ稟ケ教化伝修ヲ俟タズシテ自然ニ完成セルモノナリ。故ニ其物ニ接シテ活動スルヤ。迸發即応恰モ影ノ形ニ從ヒ響ノ声ニ應スル力如ク毫毛礙滯スルコトナキナリ。氏ハ之ヲ以テ紛ヲ解キ。難ヲ救ヒ。身ヲ護シ。人ヲ助ケ。國ヲ保チ。世ヲ濟フ。其功績モ亦偉ナリト謂フ可シ矣。且ツ氏ハ頑愚蒙昧ノ世ニ生レ。其道理ヲ以テ悟シ難キヤ。則チ大猫虎豹獅子狼等ノ實物ヲ藉リ。仮ヲ以テ真ヲ説キ譬喻ヲ以テ道ヲ談ズ。其言卑近ト雖トモ其旨深遠

ナリ。所謂伊蘇普物語ノ如キ其書各國ニ行ハレ。皆以テ児童修身ノ教科ニ。引用セリ故ニ伊蘇普ノ名ヲ称スル。三尺ノ児童尚能ク之ヲ記ス而シテ独リ怪シム。其伝記実履ニ至テハ大人学士尚之ヲ知ル者希ナリ。是豈ニ史伝ノ欠漏ニ原因セサルヲ得ンヤ。乙未（ママ）ノ歳余病ニ臥シ会仏人賦恩底奴氏ノ詩集ヲ閱ス。其書伊蘇普ノ伝紀ヲ掲ク。固ヨリ略伝ニ属スト雖トモ。亦以テ伊氏一代ノ言動ヲ概知スルニ足ル。而シテ紛難ニ際シ其頓才英智ノ煥發スル所ニ至テハ不覺快哉ヲ呼ヒ。万床の鬱悶ヲ忘ルゝコト屢々ナリ余甚夕之ヲ愛読ス。郷人秋野君文才アリ。余ノ病ニ罹リシヨリ日夕侍坐病ヲ看ル。余依テ病苦ノ暇。原書ヲ執テ臥ナカラ漸ク全編ヲ卒フ。君乃チ之ヲ一巻ノ書冊ニ編シ。題シテ伊蘇普實伝ト云フ。曰ク此書以テ史伝ノ欠漏ヲ弥縫シ。彼ノ名ヲ知テ実ヲ知ラザル者ノ参考ト為ス可シ。病ムト雖トモ。強テ一片ノ言ヲ叙セヨト余笑テ之ヲ諾シ乃チ此序文ヲ作ル。

明治廿八年乙未九月

### 【五十嵐喜広の序文】

堀 三 友 識

頃日、畏友秋野繁吉君、一書を携へ来り、嘆咽余に告げて曰く、此書元と余及親友故堀三友氏が病苦の間を忍んで相共に編せしもの、稿成りて將に梓に上せんとするに当り、氏は端なくも病革りて、簣を他界に易へぬと、余之を聞いて同情の涙に咽びつゝ、取つて披見せは、これなん、余が多年座右の愛読書たる、イソップ物語の著者イソップの伝記なり、読み來り読み去りて転た千歳の下知己相見の感胸臆に溢る、即ち君に勧むるに速に之を世に公にせんことを以てすれば君も亦た直に快諾

して、上梓の業を余に托し且つ余の不肖に強ゆるに校閲の事を以てせらる余の不学不文何ぞ著者の意を満すを得ん。思ふに今や邦家多事多端、教育、政治、文学、工業、宗教、慈善、等百般の事業、大に勃興して東洋文明の枢機は、専ら僅かに三千里方たる吾孤島帝国の双肩に繋れり是れ宜しく正に胸中清涼洒落、一介の塵埃を留めず識見、活卓々、洞破層雲の上に及び深淵の底に徹し機鋒、縱横円転、游刃物碍を劈解する底の、偉人物輩出せんことを、渴望すべき秋にあらずや、此書若し世に一出して、之等の要求に対し、世道人心を開拓するに於て聊か補益する所あらば、余及著者の共に、幸栄とする所元より論勿きのみならず、故堀三友君も亦た其れ天上に一層の安慰を増すを得ん乎。

明治卅二年一月

濃飛育児院東京支部にて

五十嵐 喜 広

堀は「乙未（「乙未」）ノ歳」明治二十八年に、「仏人賦恩底奴氏ノ詩集」の「伊蘇普ノ伝紀」、つまりラ・フォンテーヌの『寓話』中の「フレイリギアの人イソップの生涯」を翻訳した。「全編ヲ卒フ」とあるから、事實上訳文は堀一人の仕事であろう。病臥にあつた堀に代わつて友人秋野が奔走した結果、五十嵐の協力を得て出版にこぎ着けた。序文まで用意しながら出版まで三年余がかかり、不幸にも堀は他界してしまつたという経緯がわかる。本文は文語体。伝記の中に普通はイソップ寓話とされる次の二話が繰り込まれている。

1 「伊蘇普の所行クサンチュス夫人を離縁せしむ」 12 (A)

2 「サモース人伊蘇普を以て困難に換ふ」 26 (A 153)

坪内雄藏『文学叢書 英詩文評』(明治三五年六月)  
坪内雄藏『英文評』(明治一六・一七年頃か)

『文学叢書 英詩文評』は坪内雄藏(逍遙) (一八五九～一九三五)が早稲田大学で行つた講義をまとめたもの。早稲田大学出版部刊。その八、九年前に刊行された『英文評』(東京専門学校出版部)の改訂版である。その両書に「語法手引」の例として、以下のイソップ寓話が挙げられる。

### The Bundle of Sticks 15 (A 53)

原文を「やへトハベヤツ」に分解し、訳法を解説したのである。分解せられた英文を復元するに以下のとおりとなる。いわば James 本、Townsend 本、Stickney 本とも異なり、原書が何かは不明である。

### The Bundle of Sticks.

A father had seven sons who were always quarreling with one another. As this distressed the father very much, he one day desired all of them to come to his chamber. He there laid before them seven sticks which were fastened together. "Now", said he, "I will give a hundred crowns to that one of you who can break this bundle of sticks asunder." Each of them tried to the utmost of his strength, and each was obliged to confess that he could not break it. "And yet" said the

father. "there is no difficulty about it. He then untied the bundle, and broke one stick after the other with the greatest ease. As long as you hold together, you are a match for all your enemies; but if you quarrel and separate, it will happen to you as to these sticks which you see lying broken on the ground.

### 東基吉『家庭童話母のみやげ』(明治三八年一〇月)

東京の同文館刊。「やす」「あす」を用いた口語体。東基吉(一八七一～一九五八)は當時東京女子師範学校教授で、幼児教育の権威者。「可愛きお子様へのみやげ話の料にもむかひ」の書物をおひ母やま方へ進呈いたします。明治三十八年十月著者との序文が付いてる。母親が子ともに読み聞かせる」とを想定したのである。多くの創作童話を載せた後に「こせりゆの話」と題して以下の一〇話を載せる。またそれとは別に唱歌「兎と亀」を載せる。

東が中心となりて発行した幼児教育・婦人教育の月刊誌『婦人と子供』にも百近いイソップ寓話が掲載されていふ。これらの本文を比べると、五話はほぼ同文である。

### 「こせりゆの話」

- |                            |                        |
|----------------------------|------------------------|
| 1 「其」<br>蛙と牝牛」 (A 376) (締) | 2 「其」<br>櫻の木と薄」 (A 70) |
| 3 「其」<br>獅子と鼠」 (A 150)     | 4 「其」<br>兎と亀」 (A 226)  |

- 5 「其五 狼と鶴」(A 156) (絵)  
『婦人と子ども』第三卷第三号 (明治三六年三月)  
の「狼と鶴」とほぼ同文。
- 6 「其六 父と子ども」(A 53)  
『婦人と子ども』第三卷第三号 (明治三六年三月)  
の「父とこども」とほぼ同文。
- 7 「其七 驢馬と狐と獅子と」(A 191)  
『婦人と子ども』第三卷第六号 (明治三六年六月)  
の「驢馬と狐と獅子と」とほぼ同文。
- 8 「其八 牝獣子」(A 257)  
『婦人と子ども』第三卷第六号 (明治三六年六月)  
の「牝獣子」とほぼ同文。
- 9 「其九 犬と影」(A 133) (絵)  
『婦人と子ども』第三卷第五号 (明治三六年五月)  
の「犬と影」とほぼ同文。
- 10 「其十 鼠の相談」(A 613) (絵)  
『家庭童話母のみやげ』の続篇。同じく東京の同文館  
刊。「修身の例話めかないことに注意した」「はしがき」と  
言い、修身書とは一線を画す。創作童話の後に「いそ  
つぶの話」一〇話を載せる。「です」「ます」を用いた  
口語体。
- 11 「兎と亀」(A 226)  
東基吉作歌、鈴木毅一作曲の唱歌で、五線譜付きで  
ある。鈴木（一八七七～一九二六）は滝廉太郎の東  
京音楽学校時代の親友として知られる。現在でも歌  
われる「もしもしかめよ」で始まる石原和三郎作歌  
・納所弁次郎作曲の「うさぎとかめ」はこの四年前  
の明治三四年には作られている。東の作歌を引用し  
ておこう。
- 「兎」足のみじかい亀の子を／日本一ののろまよと／ゆだ

んをしたので後れたり／こんなに口惜しい事はない  
「亀」わたしのようなのろまでも／せつせとゆけばこのとほ  
り／走るにはやい兎さん／負かしてやるに訳はない

### 東基吉『教育童話子供の樂園』(明治四〇年四月)

『家庭童話母のみやげ』の続篇。同じく東京の同文館  
刊。「修身の例話めかないことに注意した」「はしがき」と  
言い、修身書とは一線を画す。創作童話の後に「いそ  
つぶの話」一〇話を載せる。「です」「ます」を用いた  
口語体。

- 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 「其一 鼠と蛙と鳶」(A 38) (絵)  
「其二 烏と狐」(A 124) (絵)  
「其三 蟻と鳶」(A 235) (絵)  
「其四 狐と鶴」(A 426) (絵)  
「其五 友達と熊」(A 65) (絵)  
「其六 ひとと馬」(A 180) (絵)  
「其七 ひとと獅子」(A 260) (絵)  
「其八 金の卵」(A 58) (絵)  
「其九 犬と金の卵」(A 22) (絵)  
「其十 犬と兔」(A 331) (絵)  
「其十一 獣と蝙蝠」(A 566) (絵)

「少年お伽噺」シリーズ附録「幼年お伽噺」  
明治四〇年頃から東京の武田博盛堂が「少年お伽噺」

と題したシリーズ物を刊行している。各冊ほとんどが二ページの小冊子である。少なくとも第四〇編まで出されている。多くは歴史上の人物にまつわる教訓話であるが、各冊には、本編一話の後に「幼年お伽噺」と称した附録一話が付いている。この附録がしばしばイソップ寓話の翻案となっている。附録は本編よりも低い年齢層を読者対象としている。全て挿絵が付いている。本編「春日局」に対し、附録「鼠の相談」（猫に鈴を付ける相談の話）を配するように、両方の話に関連性はない。「ます」を用いた口語体。

筆者が見ることができたのは第一～一二・二九・三〇・三一～三五・三八～四〇編の計三〇編であり、他は所在不明のため実見していない。そのうちイソップの翻案は第一～六・一一・一三～一八・二〇～二二編の計一六編に見られる。記した刊行年月は初版とは限らないので注意していただきたい。多くは伊藤小翠の文、笠井鳳斎の絵から成る。伊藤については本シリーズ以外の事跡は不明。笠井の生没年は不明だが、昭和初期まで絵筆を執っている。

なお、本シリーズの後も、後述する「明治少年お伽噺」「絵入日本お伽噺」といった「お伽噺」をタイトルに含むシリーズ物が刊行されている。これらには今日なら「お伽話」とは呼び難い歴史上の逸話が多く入っている。当時は幼児や少年少女向けの短い読み物を「お伽噺」と称していたようだ。

1 第一編『山賊退治』（明治四一年一月第一〇版）附録

「金の斧」（A 73）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

2 第二編『春日局』（明治四三年二月）附録

「鼠の相談」（A 613）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

3 第二編『曾呂利新左衛門』（明治四〇年九月）附録

「鴉と鶴」（A 398）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

4 第四編『少年武者修行』（明治四〇年一二月）附録

「鼠のお客」（A 352）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

5 第五編『狸のお使』（明治四一年七月）附録

「兔馬」（A 181）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

6 第六編『水戸黄門』（明治四一年一月）附録

7 「嘘つき太郎」（A 210）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

8 第一三編『悪魔退治』（明治四一年一月）附録

「獅子王」（A 156）教堂散史著、笠井鳳斎（ママ）画。

9 第一四編『怠惰太郎』（明治四三年一二月）附録

「蛙の天罰」（表紙には「蛙の相談」）（A 44）

伊藤小翠著、三宅花塘画。

10 第一五編『袈裟御前』（明治四一年一月）附録

「金の卵」（A 87）伊藤小翠編、笠井鳳斎画。

11 第一六編『巴御前』（明治四一年七月）附録

「寝ぼ助兎」（A 226）伊藤小翠著、笠井鳳斎画。

12 第一七編『木村重成』（明治四三年一二月）附録

「孔雀の偽物」（A 472）伊藤小翠著、笠井鳳斎画。

14 第二〇編『和氣清麿』（明治四一年七月）附錄  
「欲張犬」（A 133）伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

15 第二一編『お猿の兵隊』（明治四一年七月）附錄  
「狐の御馳走」（A 426）伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

16 第二二編『天人娘』（明治四一年七月）附錄  
「獅子の聾入」（A 140）伊藤小翠編、笠井鳳齋画。

### 「明治少年お伽噺」シリーズ

東京の島鮮堂から出された少年少女向け読み物のシリーズ。中川柳涯編、稻垣蝸堂（静斎）画。各編一話で、第三六編まで刊行されている。中川には歴史読物や実用的な文章作法の著作がある。また『ポケット伊蘇普物語』（日吉堂、明治四三年一〇月）というイソップ寓話集も編んでいる。稻垣は少年向け図書の挿絵を多く描いている。

このシリーズの特徴は各編冒頭に唱歌が付いていることである。唱歌は皆、七五七五七五を一連とし、五連で構成されている。「唱歌」というからには、歌われることを前提にしていたのであるが、音譜はない。七五の四句繰り返しの歌は当時既に「港」（空も港も夜は晴れて……）明治二九年にはある）「汽笛一声」（汽笛一声新橋を……）明治三三年初出）「うさぎとかめ」（もしもしかめよ、かめさんよ……）明治三四四年）などがあるので、これら既存のメロディーで歌うことを見定しているのかとも想像される。

筆者が実際に見たのは第四・六八・一〇一二編の

みである。他は所在不明のため未見。そのうち第四・六八・一二編はイソップ寓話。未見の編では第三編「猫と鼠」、第四編「獅子と羊飼」が、タイトルから推測すると、イソップ寓話の可能性がある。他は「赤穂義士」「牛若丸」など多く歴史物である。本編は「ます」を用いた口語体。

唱歌は本編の話の要約になつてるので、引用しておく。

### 1 第四編『狼と狐』（明治四二年一月）（A 258）（絵）

ある山奥のその奥に／獅子の病を見舞はんど／犬・猿・兔・狼や／熊も参りて看護する。  
中に狐は一度も／姿を見せず何處へか／隠れて来ぬに一同は／不思議な事と思ひけり。  
常から不仲の狼は／時こそ来れど大王に／狐の悪戯並べ  
立て／したり顔して告げる。  
大王聞いて腹を立て／折柄出で来た狐をば／捕へて叱れば  
大王の／薬を掘りに行たと云ふ。  
大王声を和らげて／薬を問へば／狼の／肝ぞと云ふに狼  
は／其の場に裂かれて死にけり。

### 初春の風の音をききう

りうがい生

### 2 第六編『旅人と熊』（明治四二年一月）（A 65）（絵）

旅人と熊の歌  
一度友に救はれて／嬉々へんよしもなく／君に危難のあ

さらばこれより連れ立ちて／旅行をば為んど行く森の／中に  
てあはれ大熊の喰はんとする／出逢けり。  
助けられたる人は／早くも熊を見付け出し／物をも云は  
ず木に攀り／恩ある友を捨てにけり。  
後れし友は熊を見て／逃る間なければ死を粋ひ／顔腹手足  
を喰がれしが／漸く危難を免れけり。  
逃げたる友は木を降りて／何をか熊が云ひたると／問へば危  
難を知らせざる／友をば持つなど云ひきとぞ。

3 第八編『孔雀の願ひ』（明治四二年一月）（A 294）（絵）

孔雀の願ひの歌  
色さまざまの彩色に／世に類なき羽翼有ちし／孔雀ぞ鳥  
の王なりと／心窃かに思ひけり。  
ある日鶴に逢ひし時／おのが羽を打ち拡げ／誇りて鶴の色  
なきを／口を極めて蔑如けり。  
鶴は怒らず微笑みて／何を誇るぞよしや身に／五色の翼あ  
るどても／空翔ることは能ひまじ。  
地に這ふ虫を漁りつつ／歌ひも得せぬ下鳥より／星まで届  
く声を有ち／自由に翔るが尊きぞ。  
孔雀は聞きて愛神に／声と翼を願ひしが／足るを知れよ  
と諭されて／今も翼を誇るなり

「絵入日本お伽噺」シリーズ附録「少年教育お伽噺」  
東京の島鮮堂から出された少年向け読み物のシリーズ。  
ズ。正確な数は不明だが一五〇編以上続いている。広告  
の文章がこのシリーズの性格を表しているので、次に引  
用しておく。  
少年少女諸君ハ此日本お伽噺ヲ第一編ヨリ一冊ツツ買テオ  
読ミニ成ルト普通修業ナルノト滑稽ニテオ笑ヒニナルノ  
ト日本ノ歴史ガ自然ニオワカリニ成リ升ソウシテ待屈ノ時ニハ  
何ノオ斬デモ出来升是非買テ揃ヘテオ置キナサル様御勧メ  
翅あれども鳥ならず／姿は鼠に似たれども／鼠の仲間  
に入れられず／あはれ不思議な蝙蝠よ。  
一年鳥と獸らが／戦ひなせし其の時に／戦争の様子を見  
定めて／彼方此方と迷ひしが。  
戦ひ戦みし其のあとで／二つ心の蝙蝠は／昼は出るなど夜  
よりは／出られぬ身とは成に覺え。  
鳥にもあらぬ蝙蝠が／鳥の真似せし酬ひにて／一生逆に  
身を吊るし／休めぬ身とは成にけり。  
世の人びとも其の通り／これと定まる心なく／迷はば到底  
信用を／人より受ることならず。

4 第一一編『蝙蝠の天罰』（明治四二年一月）（A 172）  
566）（絵）  
本編はイソップの一話を組み合わせて一話とする。  
蝙蝠の天罰の歌

各編、本編一話と「少年教育お伽噺」という附録一話  
からなる。本編はほとんどが歴史上の逸話であるのに對  
し附録は昔話や童話である。全て挿絵が付いている。こ  
の附録にイソップ寓話がいくつか採用されている。本編

と附録に内容上の関連性は認められない。文体は口語体。筆者は第一・三・一六・一八・三二・四〇・四七・四八・五二・五四・五七・六一・六二・六八・七二・七五・八一・八四・九〇・九三・九五・一一七・一一八・一二六・一三五・一五〇編を実見（複写を含む）している。それ以外は所在不明。そのうち第一・三・一六・一八・二七・三二・四七・四八・五七・六一・六二・六八・八一・八四・九五・一三五編がイソップ寓話である。第一・三・一六・一八・一三五編では二話を組み合わせて一話とする工夫が見られる。

記した刊行年月は、筆者が見た版のもので、初版とは限らない。9 第五七編は「大正」となっているが、編次から推して、初版は明治期と思われる。

1 第一編『鎮西八郎為朝』（明治四三年三月）附録  
中川柳涯編・山本佳年画「宝の所在」（表紙）、「百姓と息子」（内題）（A 42・285）

2 第三編『毛谷村六助』（明治四三年三月）附録

中川柳涯編・山本佳年画「狼の後悔」（A 156・260）

3 第一六編『楠正行』（明治四三年三月）附録  
青葉山人述・笠井鳳斎画「鳥の智恵」（A 390・490）

4 第一八編『曾我兄弟』（明治四二年七月）附録  
中川柳涯編・笠井鳳斎画「猫と鼠」（A 140・613）

5 第二七編『五郎正宗』（明治四二年一一月）附録  
中川柳涯編・笠井鳳斎画「軍人と馬」（A 320・330）

6 第三二編『忠僕直助』（明治四三年四月）附録  
中川柳涯編・笠井鳳斎画「犬の旅行」（A 135）

7 第四七編『菅原道真』（明治四三年三月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「二個の瓶」（A 378）

8 第四八編『中将姫』（明治四二年一一月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「兎と蛙」（A 138）

9 第五七編『荒木又右衛門』（大正七年）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「獅子と兔」（A 148）

10 第六一編『武雄兄弟島廻り』（明治四三年五月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「自分の役目」（A 476）

11 第六二編『高山彦九郎』（明治四四年四月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「賢い洗濯屋」（A 29）

12 第六八編『常盤御前』（明治四三年九月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「狐と仮面」（A 27）

13 第八一編『熊本籠城』（明治四四年四月）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「夢中の衣装」（*Aesopica*）

Milk-Can と同話)  
にはない。James 本の 104 The Country Maid and her

14 第八四編『黒百合姫』（明治四四年一月）附録

青葉山人述・笠井鳳斎画「乗馬と驢馬」（A 357・565）

15 第九五編『金言姫』（明治四四年一月）附録  
青葉山人述・笠井鳳斎画「老人の愚痴」（A 60）

16 第一三五編『酒井の太鼓』（明治四四年六月）附録  
中川柳涯編・山本佳年画「商人と驢馬」（A 179・180）

次の二例は明らかに大正期の刊行なのでこの稿の対象にはならないが、参考までに付け加えておく。  
編次不明『捨られた子』（大正三年）附録  
青葉山人編・笠井鳳斎画「蛙の移住」（A 43）

編次不明『母のみとり』(大正七年) 附録

青葉山人編・笠井鳳斎画「母蟹と児蟹」(A 322)

### 小蝶山人『少年お伽演説』(明治四三年六月)

東京の岡村書店刊。表紙に「小蝶山人編」とあり、奥付に「編輯兼發行者」として「岡村庄兵衛」を挙げているから、小蝶山人とは岡村書店の岡村庄兵衛(一八六〇~一九二三)と思われる。岡村書店は一八九九年頃から

少年向けの本を中心に出版活動を行っている出版社。

教訓的な話を集めた修身本の一つだが、演説口調で示すところに特徴がある。その口調は文語体を交えた口語體。総話数一一八のうちイソップ由来と思われる話が七話ある。

- |                     |             |
|---------------------|-------------|
| 1 「○欲深き者を戒む」        | 23 (A 133)  |
| 2 「○獅子と蚊の話」         | 45 (A 255)  |
| 3 「○猫に強き名を付けんとしたる話」 | 69 (A 619)  |
| 4 「○鹿の譬話」           | 83 (A 74)   |
| 5 「○智恵の競争お伽演説開会の趣旨」 | 115 (A 390) |
| 6 「○他人に對して親切にせよ」    | 121 (A 150) |
| 7 「○我か務めを怠る者を戒む」    | 126 (A 181) |

馬場直美『お伽百題』(明治四三年一〇月)  
東京の岡村書店刊。日本、中国、インド、ヨーロッパ各地から物語を拾い集めてお伽話風に仕立てている。「百題」とあるが実際は一〇一話。「日本昔懸」「英國物語集」「イソップ」などと一つ一つ出自を明示する。以下

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 9 「九 懶惰者」   | 5 (A 373)    |
| 8 「一一世は憐愍」  | 6 (A 46)     |
| 7 「一二愚かな犬」  | 7 (A 342135) |
| 6 「一二愚かな犬」  | 7 (A 342135) |
| 5 「九 懶惰者」   | 8 (A 373)    |
| 4 「五 賢い狐」   | 9 (A 426)    |
| 3 「六 欲張医者」  | 10 (A 426)   |
| 2 「五 賢い狐」   | 11 (A 426)   |
| 1 「四 大欲は無欲」 | 12 (A 426)   |

The Boy and the Filberts (同話) (絵)  
The Boy and the Filberts (同話) (絵)

馬場直美『お伽百題』(明治四三年一〇月)  
東京の岡村書店刊。日本、中国、インド、ヨーロッパ各地から物語を拾い集めてお伽話風に仕立てている。「百題」とあるが実際は一〇一話。「日本昔懸」「英國物語集」「イソップ」などと一つ一つ出自を明示する。以下

のよう約半分の五〇弱がイソップ寓話由来。「一九〇弱がイソップ寓話に見当たらない。「二二一桃太郎」を「イソツプ」とし、次の「二二一怜俐い雀」を「日本昔懸」とするが、これは明らかに両者を取り違えた誤植である。文体は「です・ます」を用いた口語体。

馬場直美は『新ポケット新訳イソップ物語』(岡村盛花堂、明治四三年一〇月)というイソップの翻訳本を同時期に出版している。両者に共通する話を比べると、本文は異なる。『お伽百題』の方は、例えば「四一 蝦蟆博士」でヒキガエルにドイツ帰りの博士と言わせるなど、改変が目立つ。なお、岡村盛花堂は、事実上岡村書店と同じ出版社。その他馬場には文章作法の本、ヨーロッパの文豪の文を集めた『通俗泰西文芸名作集』(帝国講学会、大正一四年五月)などの著書がある。

The Boy and the Filberts (同話) (絵)  
The Boy and the Filberts (同話) (絵)

馬場直美『お伽百題』(明治四三年一〇月)  
東京の岡村書店刊。日本、中国、インド、ヨーロッパ各地から物語を拾い集めてお伽話風に仕立てている。「百題」とあるが実際は一〇一話。「日本昔懸」「英國物語集」「イソップ」などと一つ一つ出自を明示する。以下

33	32	31	30	29	28	「一五	「一六	「一七	「一八	「一九	「一十
「八〇	「七三	「七二	「七一	「七〇	「六九	「五二	「五三	「五四	「五五	「五六	「五七
賢い犬」 (A 403)	守りの狼！」 (A 225)	欲張りの老婆！」 (A 58)	狼！」 (A 210)	不孝の報」 (A 678)	天文学者」 (A 40)	鼠の国會」 (A 70)	熊の咽喉」 (A 65)	蝦博士」 (A 289)	兎の失敗」 (A 188)	愚かな驢馬」 (A 91)	蟲博士」 (A 255)
「八一	「七六	「七五	「七四	「七〇	「六八	「六七	「六六	「六五	「六四	「六三	「六二
賢い犬」 (A 403)	守りの狼！」 (A 225)	欲張りの老婆！」 (A 58)	狼！」 (A 210)	不孝の報」 (A 678)	天文学者」 (A 40)	鼠の国會」 (A 70)	熊の咽喉」 (A 65)	蝦博士」 (A 289)	兎の失敗」 (A 188)	愚かな驢馬」 (A 91)	蟲博士」 (A 255)

目次はこれを欠くので、番号が付されていない。仮に

仮に

27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
「六八	「六八	「六八	「六八	「六八	「六八	「六七	「六七	「六七	「六七	「六七	「六七
「六八—2	「兔と亀」 (A 226)	「孔雀」 (A 472)	「狼！」 (A 58)	「七〇	「七二	「七三	「七四	「七五	「七六	「七七	「七八
「六八—2	「兔と亀」 (A 226)	「孔雀」 (A 472)	「狼！」 (A 58)	「七〇	「七二	「七三	「七四	「七五	「七六	「七七	「七八
「六八—2」とする。				「七〇	「七二	「七三	「七四	「七五	「七六	「七七	「七八

（イソップ伝）

47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36
「一〇〇	「九九	「九八	「九六	「九五	「九四	「九三	「九二	「九一	「八八	「八七	「八六
愚な狐」 (A 148)	欲張獅子の失敗」 (A 180)	商人と驢馬」 (A 566)	狡猾る蝙蝠」 (A 566)	兔と蛙」 (A 138)	木と斧」 (A 150)	蟹の母子と鼠」 (A 322)	蟹の大王」 (A 75)	隻眼の鹿」 (A 349)	蠟燭の大言」 (A 569)	犬と料理人」 (A 322)	「八二
「一〇〇	「九九	「九八	「九六	「九五	「九四	「九三	「九二	「九一	「八八	「八七	「八六
愚な狐」 (A 148)	欲張獅子の失敗」 (A 180)	商人と驢馬」 (A 566)	狡猾る蝙蝠」 (A 566)	兔と蛙」 (A 138)	木と斧」 (A 150)	蟹の母子と鼠」 (A 322)	蟹の大王」 (A 75)	隻眼の鹿」 (A 349)	蠟燭の大言」 (A 569)	犬と料理人」 (A 322)	「八二
愚な狐」 (A 148)	欲張獅子の失敗」 (A 180)	商人と驢馬」 (A 566)	狡猾る蝙蝠」 (A 566)	兔と蛙」 (A 138)	木と斧」 (A 150)	蟹の母子と鼠」 (A 322)	蟹の大王」 (A 75)	隻眼の鹿」 (A 349)	蠟燭の大言」 (A 569)	犬と料理人」 (A 322)	「八二

天籟山人『新お伽十八番』(明治四四年一月)  
白雪姫などを改作したお伽話一八を載せる。東京の岡  
村書店刊。「です」「ます」を用いた口語体。天籟山人  
の名は編者として表紙にあるだけで、奥付にも記載がない。  
他の著書も見当たらず、不明とせざるを得ない。日  
本画家寺崎広業(一八六六～一九一九)が「天籟山(散)  
人」を称しているが、編者と断定することはできない。

目次には「獨逸物語集」に分類されているが、イソツ  
プ由来とみなす。  
目次には「獨逸物語集」に分類されているが、イソツ  
プ由来とみなす。  
Trees and the Axe と同話

43 42 「九四 番の宝」  
(A 42)

41 「九三 木と斧」  
(A 150)

40 「九二 獅子と鼠」  
(A 81)

39 「九一 狐と猿」  
(A 322)

38 「八九 蠟燭の大言」  
(A 569)

37 「八八 犬と料理人」  
(A 322)

36 「八七 蟹の大王」  
(A 75)

35 「八六 駒と蟹の母子と鼠」  
(A 322)

34 「八二 駒と蟹の母子と鼠」  
(A 75)

人には「九九」とあるが

次の「一話がイソップ寓話の改作である。

「第十七番 悪戯小僧」(A 210)

ころは不明である。

また渡部温『通俗伊蘇普物語』に依拠したと推定されるのが七十余話ある。『通俗伊蘇普物語』には初版(明治六年)、再版(明治八年)、改正増補版(明治二一年)があるが、初版に拠っていることが、22「鷺と狼の話」でわかる。これは「仔羊と狼の話」とすべきものであり、事実渡部の再版、改正増補版ではそうなっている。ところが初版では渡部は *Kid* を *kite* と誤訳し「鳶と狼の話」てしまつたものであり、鈴木はそれをそのまま引き継いでいる。

東京の大川屋書店刊。冒頭に「勅諭」即ち教育勅語を置き、続いて92「熊と旅人の話」の挿絵を載せる。これ以外に挿絵はない。鈴木源四郎は日本史に題材を採った少年向けの図書を多く書いていた。それ以外は不明。

副題に「動物の巻」とあり、動物寓話集であるが、「附録」に動物の登場しない話を載せる。これにもイソップ由来の話が一八話ある。これを含め百以上のイソップ寓話を収める。そして収載話の殆どがイソップ寓話でもあるので、イソップ寓話集に分類してもよさそうである。

しかし「山内一豊駿馬を買ふ話」「晋の車胤勉学の話」など、数少ないが日本、中国の逸話もあるので、一般的の寓話集等と見なし、本稿の対象とした。

複数の文献を原拠としているので、話によつて文語体あり口語体ありと、統一性がない。その依拠した文献について詳細な調査はしていないが、気づいた範囲でいうと、前述の小池清『通俗修身談』(或いは同内容の西村寅二郎の二書)からタイトル、本文もそのまま一二話を探る。載せる順も小池(或いは西村)のに合致する。

鈴木は「文廻屋主人」とも称する。西村寅二郎も「文廻屋主人」を称している。これが偶然の一致なのか、両者は同一人物なのか、何らかの関係があるのか、現在のと

要するに先行の寓話集類からの寄せ集めに近い作りであり、オリジナリティーは感じられない。7「鷺と鳩の話」と64「鷺と鳥の話」、12「雀と人間との話」と59「雀と教解の話」は本文は異なるが同話である。これは、あれこれの文献から選んだ際に、同じ寓話と気づかずにつき採用してしまつたものと思われる。このように、編集に余り周到さが見られない。

1 「●蟻と蠅との話」 4 (A 112・373)

『通俗修身談』の「蟻と蠅との話」と同文。

2 「●馬と馬丁との話」 7 (A 319)

『通俗修身談』の「馬と馬丁との話」と同文。

3 「●蝙蝠と鼈との話」 17 (A 172)

『通俗修身談』の「蝙蝠と鼈との話」と同文。

4 「●蜂と蟋蟀との話」 27 (A 112・373)

『通俗修身談』の「蜂と蟋蟀との話」と同文。

5 「●狐と鶏との話」 31 (A 671)

『通俗修身談』の「蜂と蟋蟀との話」と同文。

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6																								
「● 獅子と羊の話」 弓にて射られたる驚の話」 58 (A 514)	「● 狐と狼の話」 弓にて射られたる驚の話」 59 (A 276)	「● 狐と狼の話」 弓にて射られたる驚の話」 58 (A 514)	「● 狐と狼の話」 弓にて射られたる驚の話」 57 (A 9)	「● 狐と狼の話」 弓にて射られたる驚の話」 56 (A 160)	「● 盗賊と木像の話」 弓にて射られたる驚の話」 56 (A 403)	「● 狼と鶴の話」 弓にて射られたる驚の話」 56 (A 156)	「● 雀と人間の話」 弓にて射られたる驚の話」 55 (A 182)	「● 狐と鶴の話」 弓にて射られたる驚の話」 55 (A 226)	「● 狐と鶴の話」 弓にて射られたる驚の話」 54 (A 133)	「● 狐と鶴の話」 弓にて射られたる驚の話」 53 (A 627)	「● 狐と鶴の話」 弓にて射られたる驚の話」 52 (A 486)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 51 (A 426)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 50 (A 613)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 49 (A 48)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 48 (A 61)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 47 (A 42)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 46 (A 22)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 45 (A 21)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 44 (A 218)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 43 (A 521)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 42 (A 36)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 41 (A 38)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 40 (A 155)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 39 (A 15)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 38 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 37 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 36 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 35 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 34 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 33 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 32 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 31 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 30 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 29 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 28 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 27 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 26 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 25 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 24 (A 2)	「● 鳩と鳩の話」 弓にて射られたる驚の話」 23 (A 2)

31	30	29	28	27	26	25	24	23
「● 賢徳神と駱駝の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第四十九 賢徳神と駱駝の話」に拠る。	「● 獅子へ奉公する狐の話」 『通俗伊蘇普物語』の「獅子へ奉公する狐の話」に拠る。	「● 狼と羊の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第四十七 狼と羊の話」に拠る。	「● 驢馬と狒狗の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第四十六 驢馬と狒狗の話」に拠る。	「● 熊と狐の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第二十二 熊と狐の話」に拠る。	「● 田舎漢と蛇の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第十四 田舎漢と蛇の話」に拠る。	「● 狐と獅子の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第十一 狐と獅子の話」に拠る。	「● 呆和鴉の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第八 呆と狼の話」に拠る。	「● 呆和鴉の話」 『通俗伊蘇普物語』の「第四 呆和鴉の話」に拠る。

- 32 「●兎と蛙の話」 66 (A 138) 『通俗伊蘇普物語』の「第五十二 兔と蛙の話」に拋る。
- 33 「●農夫と鶴の話」 67 (A 194) 『通俗伊蘇普物語』の「第五十三 農夫と鶴の話」に拋る。
- 34 「●猿と駱駝の話」 68 (A 83) 『通俗伊蘇普物語』の「第五十五 猿と駱駝の話」に拋る。
- 35 「●鳶と狐の話」 69 (A 124) 『通俗伊蘇普物語』の「第五十五 猿と駱駝の話」に拋る。
- 36 「●鳶と扁嘴鴉の話」 70 (A 125) 『通俗伊蘇普物語』の「二疋の蛙住移の話」に拋る。
- 37 「●二疋の蛙住移の話」 71 (A 43) 『通俗伊蘇普物語』の「二疋の蛙住移の話」に拋る。
- 38 「●牝獅子と獵夫の話」 72 (A 414) 『通俗伊蘇普物語』の「二疋の蛙住移の話」に拋る。
- 39 「●猿の自慢の話」 72 (A 14) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百三十一 猿の自慢の話」に拋る。
- 40 「●獅子と野羊の話」 73 (A 338) 『通俗伊蘇普物語』の「第七十八 獅子と野羊の話」に拋る。
- 41 「●鷦鷯黄金の卵を産む話」 74 (A 87) 『通俗伊蘇普物語』の「第七十九 鷦鷯黄金の卵を産む話」に拋る。
- 42 「●蚊と牛の話」 75 (A 137) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 二疋の畜犬の話」に拋る。
- 43 「●乘馬と驢馬の話」 75 (A 565) 『通俗伊蘇普物語』の「第六十九 蚊と牛の話」に拋る。
- 44 「●蟻と鳩の話」 76 (A 235) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百二十五 乘馬と驢馬の話」に拋る。
- 45 「●谷川に立た鹿の話」 77 (A 74) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百一十八 蟻と鳩の話」に拋る。
- 46 「●盜賊と鶏の話」 78 (A 122) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百十七 谷川に立た鹿の話」に拋る。
- 47 「●鹿と獅子の話」 79 (A 76) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百十六 鹿と獅子の話」に拋る。
- 48 「●兔と獵犬の話」 80 (A 331) 『通俗伊蘇普物語』の「第三十九 兔と獵犬の話」に拋る。
- 49 「●海豚と鯨の話」 81 (A 62) 『通俗伊蘇普物語』の「第四十 海豚と鯨の話」に拋る。
- 50 「●二疋の犬の話」 81 (A 92) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 二疋の畜犬の話」に拋る。

- 51 「●馬と買客の話」 82 (A 237)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百七 馬と買客の話」に  
拋る。
- 52 「●兔と獅子の話」 84 (A 341)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 53 「●狐と仮面の話」 84 (A 27)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 54 「●乱躁虫と鳩の話」 85 (A 142507)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 55 「●獅子の病気の話」 86 (A 142507)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 56 「●雀と兔の話」 87 (A 147)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 57 「●鷦鷯と鳩の話」 88 (A 139281473)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 58 「●鷦鷯と鳩の話」 88 (A 139281473)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 59 「●獅子と熊と狐の話」 89 (A 390)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 60 「●鳩と水瓶の話」 89 (A 390)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 61 「●雀と教解の話」 90 (A 627)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百四 狐と仮面の話」に拋る。
- 62 「●驢馬と陰の話」 92 (A 460)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二百廿一 小鳥の教解の話」に拋る。
- 63 「●羊の番をする牧童の話」 95 (A 10)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十 牧童と狼の話」に拋る。
- 64 「●狼と樵夫の話」 96 (A 2)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十 牧童と狼の話」に拋る。
- 65 「●狐と樵夫の話」 96 (A 2)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十 牧童と狼の話」に拋る。
- 66 「●老たる犬の話」 97 (A 532)  
『通俗伊蘇普物語』の「第十二 老たる犬の話」に拋る。
- 67 「●鷦鷯と鳥の話」 98 (A 384)  
『通俗伊蘇普物語』の「第十五 蝇と密壺の話」に拋る。
- 68 「●鼠と蛙と鳩の話」 99 (A 80)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十 蝇と密壺の話」に拋る。
- 69 「●蠅と密壺の話」 99 (A 80)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十 蝇と密壺の話」に拋る。
- 70 「●獅子と鼠の話」 100 (A 150)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十四 獅子と鼠の話」に拋る。
- 71 「●犬と鷄と狐の話」 101 (A 252)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十四 獅子と鼠の話」に拋る。
- 72 「●蛙と牛の話」 102 (A 376)  
『通俗伊蘇普物語』の「第二十六 蛙と牛の話」に拋る。
- 73 「●驢馬と蟋蟀の話」 103 (A 184)  
『通俗伊蘇普物語』の「第五十 驢馬ときりぐすの話」に拋る。
- 74 「●牝獅子の話」 104 (A 257)  
『通俗伊蘇普物語』の「第一百十一 驢馬の陰の話」に拋る。

- 『通俗伊蘇普物語』の「第五十六 牝獅子の話」に拋る。
- 「●母と狼の話」 105 (A 158) 『通俗伊蘇普物語』の「第五十九 母と狼の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第六十 猿と海豚の話」に拋る。
- 「●猿と海豚の話」 107 (A 73) 『通俗伊蘇普物語』の「第六十一 猿と海豚の話」に拋る。
- 「●片眼の鹿の話」 108 (A 75) 『通俗伊蘇普物語』の「第三十四 片眼の鹿の話」に拋る。
- 「●鶴と雁の話」 108 (A 228) 『通俗伊蘇普物語』の「第六十七 鶴と雁の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第六十七 鶴と雁の話」に拋る。
- 「●猫と鼠の話」 109 (A 79) 『通俗伊蘇普物語』の「第七十三 猫と鼠の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第七十三 猫と鼠の話」に拋る。
- 「●鹿と葡萄蔓の話」 110 (A 77) 『通俗伊蘇普物語』の「第九十六 鹿と野葡萄の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第九十六 鹿と野葡萄の話」に拋る。
- 「●野羊と牧奴の話」 111 (A 280) 『通俗伊蘇普物語』の「第一百七 野羊と牧奴の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百七 野羊と牧奴の話」に拋る。
- 「●鹽商と驢馬の話」 112 (A 180) 『通俗伊蘇普物語』の「第一百十六 塩を脊負た驢馬の話」に拋る。
- 83 「●児輩と蛙の話」 114 (Aesopica にはない。James 本の 172 The Boys and the Frogs と同話) 84 「●盲者と狼児の話」 115 (A 37) 『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十八 盲者と狼 児の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百四十九 児輩と蛙の話」に拋る。
- 85 「●日輪を上訴た蛙の話」 116 (A 415) 86 「●鍛冶工と犬の話」 117 (A 145) 87 「●獅子と海豚の話」 116 (A 314) 『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十 獅子と海豚の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第一百七十 獅子と海豚の話」に拋る。
- 88 「●株槽のある犬の話」 119 (A 702) 89 「●牛と屠牛者の話」 119 (A 290) 90 「●馬と蛙の話」 122 (A 230) 91 「●犬と羊の話」 124 (A 478) 92 「●牛と屠牛者の話」 119 (A 290) 93 「●放蕩者と燕の話」 126 (A 169) 94 「●熊と旅人の話」 128 (A 65) 『通俗伊蘇普物語』の「第二百一十九 犬と羊の話」に拋る。
- 『通俗伊蘇普物語』の「第二百一十九 犬と羊の話」に拋る。
- 「●庸医と蝦蟆」 130 (A 289) 『通俗伊蘇普物語』の「第三十六 旅人と熊の話」に拋る。冒頭にこの話の挿絵が掲げられている。

「附錄」

- 96 「●根津権現と車引の話」 3 (A 291)  
 「●二人の旅行者と斧の話」 6 (A 67)  
 「●守銭奴の話」 7 (A 225)
- 97 「●童子と盜人の話」 8 (A 581)  
 「●童子と盜人の話」 9 (A 94)  
 「●親父と二人娘の話」 10 (A 168)
- 98 「●通俗伊蘇普物語」の「第一二百五 童子と盜人の話」に扱る。  
 「●通俗伊蘇普物語」の「第二百八十八 老爺と二人の愛女の話」に扱る。  
 「●山国の人と海の話」 11 (A 349)
- 99 「●通俗伊蘇普物語」の「第一二百五 童子と盜人の話」に扱る。  
 「●通俗伊蘇普物語」の「第一二百八十九 山国の人と海の話」に扱る。
- 100 「●ランプの話」 12 (A 70)  
 「●橡槲と蘆の話」 13 (A 60)
- 101 「●老人と死神の話」 14 (A 46)  
 「●北風と日輪の話」 15 (A 55)  
 「●通俗伊蘇普物語」の「第九十二 老人と死神の話」に扱る。
- 102 「●橡槲と蘆の話」 16 (A 378)  
 「●天文学者の話」 17 (A 40)
- 103 「●橡槲と蘆の話」 18 (A 493)  
 「●老婆と医者の話」 20 (A 57)
- 104 「●老婆と医者の話」 23 (Aesopica にはない。 James 本の 104 The Country Maid and her Milk-Can と同話)
- 105 「●牛乳壺の話」 24 (A 26)  
 「●漁人水を敲く話」 25 (A 32)
- 106 「●寡婦と幼婢の話」 15 (A 55)  
 「●通俗伊蘇普物語」の「第九十八 老寡婦と雛婢の話」に扱る。
- 107 「●一双の壺の話」 16 (A 378)  
 「●天文学者の話」 17 (A 40)
- 108 「●老婆と空壠の話」 18 (A 493)  
 「●田舎娘と牛乳壺の話」 23 (Aesopica にはない。 James 本の 104 The Country Maid and her Milk-Can と同話)
- 109 「●老婆と医者の話」 20 (A 57)
- 110 「●老婆と医者の話」 23 (Aesopica にはない。 James 本の 104 The Country Maid and her Milk-Can と同話)
- 111 「●老婆と医者の話」 24 (A 26)
- 112 「●老婆と医者の話」 25 (A 32)
- 113 「●老婆と医者の話」 26 (A 26)

に拠る。

以上、現在までに確認できた事例をリストアップした。中には一、二の図書館にしか所蔵を確認することができない文献も少なくない。子ども用読み物の多くは一度読み終えたらあとはお払い箱とばかりに忘れられる。安価であればなおさらであろう。例えば明治二〇年の『小学生徒修身教育昔話』は三錢五厘、二一年の『小学生徒修身教育漸』第一編は三錢である。因みに当時の物価を見ると、二十四年のデータになるが、氷葡萄水が四錢、サイホンラムネが三錢である。明治四〇年からの「少年お伽漸」シリーズ、四二年からの「絵入日本お伽漸」シリーズは、それぞれ一冊七錢である。四〇年のデータに依ると、一〇本入りの紙タバコは高価なナイルが二五錢、安いゴールデンバットが五錢である。こういった安価な本は多く読み捨てられていき、それ故に現在まで保存されることがまれなのだと想像される。このような当時の読書事情を考えると、散逸して今では確認できない書籍も相当数あつたに違いない。事実既に見たように、シリーズ物では所在が不明の編次のものがかなりある。

右に挙げた出版社（者）は、東京・大阪・京都・名古屋と各地に亘っている。当然予想されるように東京が最多であるが、大阪も小川畜善館、嵩山堂、安井兵助、赤志忠雅堂、文鶴堂、浜本明昇堂、刀根松之助、積善館と八社（者）に上るのが目立つ。当時の出版事情には疎いので確言はできないが、地方出版社の場合は、販売地域

も限られ、従つて読者も少数であつたとも推定される。編著者、出版社には、他の形でもイソップと関わりを持つているケースがあるので、そのことを付言しておく。

『經濟説略』の編者渡部温は、いうまでもなく明治期に最も読まれ、それ故に与えた影響も大きい『通俗伊蘇童話子ども樂園』の著者東基吉は、幼児教育・婦人教育のための月刊誌『婦人と子ども』に百近いイソップ寓話を連載している。「明治少年お伽漸」シリーズ、「絵入日本お伽漸」シリーズの中川柳涯には『ポケット伊蘇普物語』、『お伽百題』の編者馬場直美には『ポケット新訳イソップ物語』というイソップ寓話集がある。

出版社について見よう。『少年書類新伊蘇普物語』の博文館が刊行した雑誌『幼年雑誌』にはイソップの翻訳が三話掲載されている注四。『家庭教育日本修身談』の積善館は『家庭教育小学修身はなし』（明治二十四年一二月）『家庭教育幼年修身はなし』（明治二十四一二月）を出版している。この二つの『修身はなし』はタイトルからは予想できないが、イソップ寓話集である。この二つをまとめて翌年には『新訳伊蘇普物語』（明治二五年五月）の名で改めて刊行している。『少年お伽演説』『お伽百題』『新お伽十八番』の岡村書店は、先に述べたように『ポケット新訳イソップ物語』を刊行している。こちらは書店名が「岡村盛花堂」となつていて、住所も代表者名（岡村庄兵衛）も同じであり、事実上同一出版社である。

以上の結果を次ページ以下の表にまとめた。

注

一 吉見孝夫『『經濟説略』『生産道案内』『經濟要旨』のイソップ寓話』(『イソップ資料』第一一号、二〇一八年一〇月)

二 大久保編本の底本である『絵入朝野新聞』連載の本文は左記の小論に載っている。

吉見孝夫『『絵入朝野新聞』に連載された『伊曾保物語』』(『イソップ資料』第四号、二〇一四年三月)

三 『婦人と子ども』中のイソップ寓話本文は左記の小論に載っている。

吉見孝夫『明治期の雑誌に載ったイソップ寓話』(『イソップ資料』第一一号、二〇一八年一〇月)

四 『幼年雑誌』中のイソップ寓話本文は注三文献に載つてある。

## 明治期寓話集等掲載イソップ寓話対照表

- 1 寓話の配列は B. E. Perry の *Aesopica* の番号に従った。*Aesopica* 以外の寓話は、James 本の番号を「J59」のように略記した。James 本、Townsend 本にもなく、Stickney 本あるいは仮名草子『伊曾保物語』にある寓話は、それぞれ「S5」「伊・中 40」のように略記した。
- 2 *Aesopica* のタイトル名は、1 ~ 471 は中務哲郎訳『イソップ寓話集』(岩波書店、1999 年 3 月) に、472 ~ 579 は岩谷智・西村賀子訳『イソップ風寓話集』(国文社、1998 年 1 月) に従った。ただし、漢字表記は極力常用漢字の範囲にとどめるため改めた。他は Perry の *Babrius and Phaedrus* (Harvard University Press, 1965) の英文タイトルを和訳した。
- 3 各文献には、次のような略記を用い、寓話掲載箇所を以下のように示した。  
経済：『経済説略』(『生産道案内』『経済入門 一名生産道案内』『経済要旨』)。Lesson を漢数字で、Part を算用数字で示す。  
童蒙：『童蒙教草』。章を算用数字で示す。  
西稚：『西洋稚児話の友』。丁付を算用数字で示す。  
西童：『西洋童話』。丁付を算用数字で示す。  
西杖：『西洋教の杖』。巻を漢数字で、寓話番号を算用数字で示す。  
修勸：『修身勸』。篇を「初」「次」「三」で、丁付を算用数字で示す。  
日西：『日本西洋昔嘶』(『通俗絵入学芸独案内』)。ページを算用数字で示す。  
小昔：『小学生徒教育昔嘶』。巻を漢数字で、丁付を算用数字で示す。  
修昔：『小学生徒修身教育昔話』。ページを算用数字で示す。  
修教：『修身之教』。ページを算用数字で示す。  
修嘶：『小学生徒修身教育嘶』。編を漢数字で、ページを算用数字で示す。  
西日：『西洋日本昔嘶』。ページを算用数字で示す。  
修は：『家庭教育修身はなし』。ページを算用数字で示す。  
尋常：『尋常小学生徒教育』(『尋常小学生徒修身話』)。ページを算用数字で示す。  
児童：『児童教育智恵の宝』。ページを算用数字で示す。  
子を：『子供のをしえ』。ページを算用数字で示す。  
通俗：『通俗修身談』(『教育修身談』『教育修身美談』)。ページを算用数字で示す。  
面白：『面白叢談』。ページを算用数字で示す。  
書類：『少年書類新伊蘇普物語』。寓話番号を算用数字で示す。  
少仏：『少年仏教修身はなし』。ページを算用数字で示す。  
日修：『家庭教育日本修身談』。ページを算用数字で示す。  
教幼：『教育幼稚の宝』。「新教育演説」「滑稽子供演説」「少年必携子供伊蘇普」「少年教育博物ばなし」「少年必携教育幻灯会」「小学生徒少年俱楽部」「少年教育智恵かゞみ」「少年必携教育一口話」をそれぞれ「新」「滑」「伊」「博」「幻」「俱」「智」「一」で、ページを算用数字で示す。  
実伝：『伊蘇普実伝』。ページを算用数字で示す。  
英詩：『文学叢書 英詩文評釈』(『英文評釈』)。ページを算用数字で示す。  
母み：『家庭童話母のみやげ』。寓話番号を算用数字で示す。  
子楽：『教育童話子供の樂園』。寓話番号を算用数字で示す。  
少伽：『少年お伽嘶』シリーズ。編を算用数字で示す。  
明伽：『明治少年お伽嘶』シリーズ。編を算用数字で示す。  
絵伽：『絵入日本お伽嘶』シリーズ。編を算用数字で示す。  
演説：『少年お伽演説』。ページを算用数字で示す。  
百題：『お伽百題』。寓話番号を算用数字で示す。  
十八：『新お伽十八番』。寓話番号を算用数字で示す。  
動物：『少年教育修身はなし 動物の巻』。ページを算用数字で示す。

Aesopica等の番号とタイトル	掲載文献と掲載箇所
1 ワシとキツネ	修動(次19ウ)
2 ワシとコクマルガラスと羊飼い	通俗(41)・動物(38)・動物(96)
6 ヤギ飼いと野生のヤギ	修教(82)
9 井戸の中のキツネとヤギ	修動(次6ウ)・動物(57)
10 ライオンを見たキツネ	小昔(三7才)・修嘶(二5)・子を(9)・教幼(幻32)・動物(61)
11 箫を吹く漁師	尋常(34)
12 キツネとヒョウ	日西(13)・修教(20)・児童(14)
14 家柄を競うキツネと猿	修動(三28ウ)・動物(72)
16 猫と鶏	日西(8)
17 しつぽのないキツネ	西稚(10才)・修教(48)・児童(10)
18 漁師とニシン	小昔(四7才)・修は(57)
22 キツネときこり	小仏(52)・動物(93)
24 腹のふくれたキツネ	修動(初27ウ)・教幼(俱24)・少伽(18)
26 水を打つ漁師	動物(附24)
27 キツネとモルモーの面	絵伽(68)・動物(84)
29 炭屋と洗濯屋	絵伽(62)
31 ロマンス・グレーと二人の愛人	小昔(一2ウ)
32 人殺し	修動(初25ウ)・修嘶(二13)・通俗(7)・百題(51)・動物(附25)
33 ほら吹き	小昔(一6才)・百題(14)
35 人間とサテュロス	修動(次22ウ)・日西(18)・修教(38)・修嘶(5五)
37 目の見えぬ人	修教(66)・動物(115)
40 天文学者	修嘶(五14)・西日(64)・百題(72)・動物(附17)
42 農夫と息子たち	童蒙(4イ)・西稚(67)・西杖(三5)・修動(次18ウ)・絵伽(1)・百題(95)
43 水を探すカエル	西稚(5才)・西杖(二13)・修教(12)・動物(71)
44 王様を欲しがるカエル	童蒙(12才)・修動(次33ウ)・日西(20)・尋常(6)・少伽(11)
45 牛と車輪	西稚(2才)
46 北風と太陽	童蒙(16イ)・小昔(一5ウ)・教幼(博16)・百題(11)・動物(附14)
51 農夫と蛇	修動(三7ウ)
53 兄弟げんかする農夫と息子	西日(84)・英詩(15)・母み(6)
55 女主人と召し使い	修嘶(一19)・動物(附15)
57 老婆と医者	修教(54)・尋常(32)・百題(6)・動物(附20)
58 女とメンドリ	日西(17)・子楽(8)・百題(76)
60 老人と死に神	絵伽(95)・百題(15)・動物(附13)
62 イルカとハゼ	西日(28)・動物(81)
65 旅人とクマ	西杖(一16)・修動(次9ウ)・日西(29)・家庭(86)・尋常(13)・子楽(5)・明伽(6)・百題(57)・動物(128)
67 旅人とおの	西杖(二1)・修動(次11ウ)・教幼(一44)・動物(附6)
70 カシとアシ	修嘶(五15)・西日(60)・母み(2)・百題(67)・動物(附12)
73 イルカと猿	日西(24)・修教(40)・児童(10)・動物(107)
74 水辺の鹿	修動(次2ウ)・日西(1)・修嘶(三2)・教幼(博24)・少伽(14)・演説(83)・動物(77)
75 片目の鹿	西日(26)・百題(82)・動物(108)
76 鹿と洞穴のライオン	修教(80)・動物(79)
77 鹿とブドウ	修嘶(一18)・西日(44)・教幼(幻28)・動物(110)
79 猫とネズミ	動物(109)
80 ハエ	童蒙(10イ)・小昔(四4才)・西日(29)・動物(99)
81 王に選ばれた猿とキツネ	修教(10)・百題(90)
83 踊る猿とラクダ	日西(14)・小昔(一4ウ)・修教(120)・動物(68)
85 子豚と羊	西日(37)
87 金の卵を生むガチャウ	童蒙(12イ)・西稚(2ウ)・修嘶(五11)・西日(52)・少伽(15)・動物(74)
91 じゃれつくロバと主人	西杖(三6)・修動(三6ウ)・小昔(六1ウ)・少仏(31)・百題(34)・動物(63)
92 二匹の犬	修動(三2ウ)・動物(81)
94 父親と二人娘	小昔(四6才)・修嘶(一11)・動物(附9)
97 子ヤギと笛を吹くオオカミ	西日(65-77)
98 屋根の上の子ヤギとオオカミ	西日(30)・動物(61)
112 アリとセンチコガネ	経済(六2)・童蒙(13イ)・修動(初1ウ)・日西(2)・修昔(7)・尋常(1)・通俗(3)・通俗(30)・少仏(25)・百題(9)・動物(4)・動物(27)
117 角を欲しがるラクダ	修動(三15ウ)・動物(66)
122 泥棒とオンドリ	修動(初29ウ)・動物(78)
124 カラスとキツネ	修動(初28ウ)・日西(4)・少仏(9)・教幼(智44)・子楽(2)・百題(26)・動物(69)
125 ハンボソガラスとカラス	動物(70)
130 胃袋と足	経済(七3)・修動(次3ウ)・通俗(40)・少仏(36)
133 肉を運ぶ犬	修動(次4ウ)・少仏(4)・教幼(博34)・母み(9)・少伽(20)・演説(23)・百題(30)・動物(51)
135 腹をすかせた犬	教幼(新34)・絵伽(32)・百題(12)
137 蚊と牛	小昔(七才)・修嘶(一15)・西日(54)・動物(75)
138 ウサギとカエル	絵伽(48)・百題(94)・動物(66)
139 カモメとビ	修教(84)・児童(12)・動物(88)
140 恋するライオン	西日(5)・少仏(50)・少伽(22)・絵伽(18)
142 老いたライオンとキツネ	修動(次7ウ)・百題(5)・動物(86)
145 ライオンとイルカ	修嘶(一6)・動物(117)
147 ライオンとクマ	動物(89)
148 ライオンとウサギ	絵伽(57)・百題(99)
150 ライオンとネズミの恩返し	西稚(8才)・修動(次21ウ)・母み(3)・演説(121)・百題(92)・動物(100)
153 オオカミと羊	実伝(26)・動物(64)
155 オオカミと子羊	西杖(二4)・修教(46)・通俗(43)・動物(39)
156 オオカミとサギ	西稚(26ウ)・修動(初24ウ)・日西(6)・尋常(34)・少仏(61)・母み(5)・少伽(13)・絵伽(3)・動物(53)
157 オオカミとヤギ	修嘶(一9)・西日(32)
158 オオカミと老婆	小昔(四2ウ)・修嘶(一17)・動物(105)
160 けがをしたオオカミと羊	西日(58)・少仏(19)・動物(56)
168 違難者と海	修嘶(一7)・動物(附10)
169 放蕩(ほうとう)息子とツバメ	動物(126)
172 コウモリとイタチ	通俗(13)・明伽(11)・動物(17)
173 きこりとヘルメス	修嘶(二2)・少伽(1)

174 旅人と運の女神	修動(三31ウ)・小昔(四1ウ)・小昔(五7才)・修嘶(-20)
175 旅人とブラタヌス	修動(三12ウ)・修嘶(-4)・尋常(31)・百題(31)
179 ロバと庭師	尋常(17)・絵伽(135)
180 塩を運ぶロバ	修動(次16ウ)・修嘶(-27)・子楽(6)・絵伽(135)・百題(97)・動物(112)
181 ロバとロバ	少伽(5)・演説(126)
182 神像を運ぶロバ	少仏(14)・動物(55)
184 ロバとセミ	修嘶(-23)・動物(103)
186 ロバとロバ追い	日西(23)・西日(48)
187 オオカミの医者	日西(27)
188 ライオンの皮を被ったロバ	教幼(博18)・百題(52)
189 ロバとカエル	動物(123)
191 ロバとキツネとライオン	西日(62)・母み(7)
194 猿師とコウノトリ	西杖(三8)・小昔(四4ウ)・少仏(33)・動物(67)
200 盗みをする子と母親	尋常(5)
201 のどの渇いたハト	教幼(幻34)・百題(16)
203 猿と漁師	修動(初31ウ)・教幼(新46)
207 羊飼いと海	教幼(新16)
210 羊飼いのいたずら	童蒙(26イ)・小昔(三1ウ)・西日(104)・尋常(41)・子を(5)・少伽(6)・百題(73)・十八(17)・動物(95)
211 水浴びをする子供	日西(16)・修嘶(-25)
212 毛を刈られる羊	西日(14)
213 ザクロとリンゴとイバラ	修教(88)
214 モグラ	修動(三13ウ)
218 猿の子供	修動(三33ウ)・通俗(38)・動物(34)
225 守銭奴	修は(6)・百題(80)・動物(附7)
226 カメとウサギ	修動(三1ウ)・小昔(五1ウ)・尋常(11)・子を(4)・面白(154)・少仏(22)・日修(44)・教幼(清28)・母み(4)・母み(唱歌)・少伽(16)・百題(68-2)・動物(52)
227 ツバメと蛇	西日(8)
228 ガチョウとツル	動物(108)
230 カメとワシ	西童(6才)・西杖(三17)・修動(初10ウ)・小昔(六5才)・尋常(31)・動物(122)
234 オオカミと羊飼い	修動(次8ウ)・少仏(54)
235 アリとハト	修動(初8ウ)・修嘶(二14)・修は(32)・尋常(3)・畫類(66)・教幼(新40)・子楽(3)・動物(76)
237 ロバを買う男	修動(三8ウ)・小昔(一1ウ)・修教(50)・動物(82)
252 犬と鳩とキツネ	尋常(40)・百題(100)・動物(101)
255 蚊とライオン	演説(45)・百題(33)
257 ライオンとキツネ	小昔(七5ウ)・修嘶(二11)・母み(8)・動物(104)
258 病気のライオンとオオカミとキツネ	明伽(4)
260 うぬぼれオオカミとライオン	子楽(7)・絵伽(3)
265 猿師と山ウズラ	教幼(幻44)
276 射られたワシ	修動(三3ウ)・動物(59)
280 ヤギとヤギ飼い	教幼(幻20)・動物(111)
281 タナグラのオンドリ	修動(初23ウ)・動物(88)
282 漁師と魚	西日(47)
285 神像をたたきつぶした男	修教(42)・通俗(42)・絵伽(1)
287 アラブ人とグラクタ	西日(36)
288 クマとキツネ	動物(63)
289 カエルのお医者	少仏(12)・百題(41)・動物(130)
290 牛と肉屋	動物(119)
291 牛追いとヘラクレス	童蒙(5イ)・修動(初32ウ)・小昔(七2ウ)・動物(附3)
294 ツルとクジャク	修動(初3ウ)・教幼(博28)・明伽(8)
297 農夫とツル	修動(初26ウ)
302 カシノキとゼウス	教幼(伊42)
305 病気の鹿	日西(35)・修教(52)・修教(116)・児童(14)・少仏(48)
314 太陽とカエル	西日(50)・動物(116)
319 馬と馬丁	通俗(7)・動物(7)
320 馬と兵士	絵伽(27)
322 カニと母親	修は(26)・百題(84)
324 病気のカラス	少仏(7)
325 ヒバリと農夫	童蒙(5口)・西雅(11ウ)・西日(107)
326 腹病(おくびょう)な猿師	修嘶(-22)・教幼(博42)・百題(18)
328 葬会に招かれた犬	百題(89)
331 犬とウサギ	日西(11)・小昔(五4ウ)・子楽(9)・動物(80)
338 ライオンとイノシシ	西日(56)・動物(73)
339 ライオンと野生のロバ	修嘶(-2)
340 ライオンと射手	修教(24)
341 狂えるライオンと子鹿	動物(84)
342 オオカミと犬の和解	百題(13)
346 オオカミと肥えた犬	尋常(29)
347 オオカミとライオン	日西(10)・西日(40)・教幼(新44)・動物(94)
349 ランブ	小昔(七1ウ)・修嘶(二12)・西日(21/5)・百題(88)・動物(附11)
352 田舎のネズミと町のネズミ	童蒙(12八)・修動(初9ウ)・尋常(8)・少仏(4)
355 旅人と真実の女神	修教(60)
357 馬をうらやむロバ	小昔(二3才)・西日(42)・絵伽(8)
370 ラッパ兵	修動(次12ウ)・日西(33)
372 三頭の牛とライオン	少仏(45)
373 セミとアリ	経済(六2)・童蒙(13イ)・修動(初1ウ)・日西(2)・修昔(7)・尋常(1)・通俗(3)・通俗(30)・少仏(25)・百題(9)・動物(4)・動物(27)
375 はげ頭の騎手	教幼(博20)
376 自分を膨らませるヒキガエル	修動(次17ウ)・尋常(10)・母み(1)・動物(102)
378 二つのつま	修嘶(-14)・西日(82)・絵伽(747)・動物(附16)
384 ネズミとカエル	修動(次34ウ)・日西(31)・小昔(二4ウ)・尋常(2)・少仏(28)・子楽(1)・動物(98)
390 ハシボソガラスと水差し	教幼(智46)・絵伽(16)・演説(115)・百題(22)・動物(89)
394 ライオンの子分のキツネ	修嘶(-26)・動物(65)
398 カラスと白鳥	少伽(3)

403 獅子と犬	小昔(六3才)・百題(81)・動物(56)
412 川と海	西日(80)
414 雄牛と母ライオンヒノシシ	修教(86)・修斬(ニ4)・教幼(博26)・動物(72)
415 犬と鶴治屋	動物(116)
426 キツネヒヅル	西稚(3才)・西童(19ウ)・修勤(次15ウ)・通俗(52)・子棄(4)・少伽(21)・百題(8)・動物(45)
451 羊の皮を着たオオカミ	西日(35)
460 ロバの陰	動物(92)
468 月と母親	教幼(伊40)
472 高慢ちきなカラスとクジャク	童要(8才)・修勤(次10ウ)・尋常(18)・少仏(39)・教幼(幻10)・少伽(17)・百題(68)・動物(60)
473 ウサギに講釈するスズメ	動物(87)
476 ロバと羊飼いのじいさん	絵伽(61)
478 羊と犬とオオカミ	動物(124)
481 おいはれのライオンヒノシシヒウシヒロバ	西日(102)
486 トンビヒトハト	通俗(51)・動物(43)
490 ワシヒカラス	教幼(博14)・絵伽(16)
493 酒つぼと老婆	修斬(-16)・動物(附18)
499 姉と弟	修勤(三17ウ)・小昔(ニ5ウ)・修斬(-2)
503 ニワトリヒヒナと真珠	教幼(博10)
507 セミヒクロウ	動物(85)
514 王様になったライオン	西日(55)・動物(58)
521 アリヒハエ	修勤(初30ウ)・修昔(12)・尋常(19)・通俗(39)・動物(36)
532 老犬ヒ狩人	動物(97)
562a オンドリヒキツネ	修勤(三26ウ)・小昔(ニ1ウ)
565 寧大な馬	小昔(ニ3才)・修昔(14)・西日(42)・絵伽(84)・動物(75)
566 コウモリ	修勤(次5ウ)・小昔(五5ウ)・修昔(9)・修斬(ニ7)・修は(71)尋常(12)・少仏(16)・子棄(10)・明伽(11)・百題(96)
569 サルの王様	尋常(24)・百題(87)
581 少年ヒ泥棒	修勤(初11ウ)・小昔(五3才)・動物(附8)
613 ネズミ猫のことを協議する	小昔(三3才)・尋常(14)・通俗(50)・少仏(1)・母み(10)・少伽(2)・絵伽(18)・百題(63)・動物(41)
617 男の胸の中の蛇	動物(62)
619 相手を求めるネズミ	演説(69)
627 ナチングールヒフィロメラヒ船頭	修勤(初5ウ)・通俗(54)・動物(48)・動物(90)
640a 竜ヒ小作人	修勤(初6ウ)
656 ツバメヒスズメたち	童蒙(17イ)
671 キツネヒハト	修勤(初2ウ)・通俗(36)・動物(31)
678 子鹿に教える親鹿	百題(70)
699 オオカミの不運	修教(58)
702 飼い葉おけの犬	動物(119)
719 飼い主ヒ骨を乞う犬	寒伝(12)
721 父親ヒ息子ヒロバ	西稚(13才)
J59 木々ヒオノ	百題(93)
J104 田舎娘ヒ牛乳ツボ	西童(14才)・修勤(三9ウ)・絵伽(81)・動物(附23)
J130 少年ヒイラクサ	西稚(6才)
J147 少年ヒハシバミ	小昔(ニ6ウ)・百題(4)
J161 生垣ヒブドウ畠	西日(33)・教幼(博22)
J172 少年たちヒカエル	童蒙(1イ)・小昔(三6才)・教幼(幻40)・動物(114)
S5 太鼓ヒ香草の花瓶	修勤(三10ウ)
S88 猿ヒ猫	西童(4才)
S97 アラビア人とラクダ	修は(64)・尋常(23)
伊・中40 シン王ヒロバのこと	修教(56)・児童(12)
伊・下27 かわらけ慢気ヒ起こと	修勤(次46ウ)・通俗(56)
伊・下34 出家ヒ盗人のこと	尋常(20)
イソップ伝(イソップが「町までどのくらいかかるか」と尋ねられる話)	百題(27)